スラブ研究センターニュース　季刊　2009 年春号

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No. 117 May 2009

新学術領域研究

◆　第 1 回国際シンポジウムの開催　◆

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の最初の国際シンポジウムが 2009 年 7 月 9 日～10 日にスラブ研究センターで開催されます。テーマは「地域大国と持続的発展の可能性」です。ロシア、中国、インドおよびその他の地域大国が、今後国際社会のなかでどのような位置を占めていくのか、現在の「地域大国としての地位」は今後も持続可能であるのかを探ろうとするものです。具体的には、この「持続可能性」は、マクロ経済、環境、エネルギー、格差と貧困という 4 つの基本視角から検討されることになります。シンポジウムにおける議論によって、各国がこれら 4 つの領域で抱える諸問題の共通性と特殊性が明らかになるとともに、地球規模でのそれらの問題の解決の糸口も見出されるものと期待されます。さらに、国境問題に関するセッションも合わせて開催されます。暫定的なプログラムは以下のとおりです。［上垣彰（組織委員長）］

（編集部注：この国際シンポジウムは，今年度のスラブ研究センターの夏期国際シンポジウムを兼ねて開催されます。）

The First International Symposium of Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia

The Elusive Balance: Regional Powers and the Search for Sustainable Development

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第1回国際シンポジウム

地域大国と持続的発展の可能性

9–10 July 2009, Sapporo

Session 1	Economic Reforms and Macro Economic Performance 経済改革とマクロ経済
Session 2	The Politics of the Environment: Global Warming after Kyoto 環境の政治学：「京都」後の地球温暖化
Session 3	Searching for Energy Security エネルギー安全保障を求めて
Session 4	Artificial Boundaries: The Broken Heart of Eurasia 引き裂かれたユーラシア：作られた国境をめぐって
Session 5	Social Disparity and Poverty 社会的格差と貧困
Session 6	Historical Perspectives 歴史的視点から

◆　プロジェクト研究員の採用　◆

本領域研究では，若手研究者の育成を目的として、プロジェクト研究員の公募をおこないましたところ、37 名の応募がありました。厳正な審査を経て選考された以下の 5 名の方が、4 月 1 日から各大学で勤務しています。［田畑］

氏　名	博士号取得大学院	勤務地	主たる研究協力班
小松（こまつ）　久恵（ひさえ）	Jawaharlal Nehru University (India)	大阪大学世界言語研究センター	第 5 班
住家（すみか）　正芳（まさよし）	東京大学	東京大学大学院総合文化研究科	第 6 班
任（にん）　哲（てつ）	早稲田大学	早稲田大学現代中国研究所	第 2 班
星野（ほしの）　真（まさし）	神戸大学	北海道大学スラブ研究センター	第 3 班
黛（まゆずみ）　秋津（あきつ）	東京大学	東京大学大学院総合文化研究科	第 4 班

◆　新しい事務局体制　◆

4 月 1 日から新学術領域研究の事務局は、越野剛（プロジェクト・マネージャー、特任研究員）、後藤正憲（総括班プロジェクト・アシスタント、特任研究員）、小原由美子（事務補佐員）の 3 人体制となっています。［田畑］

研究の最前線

◆　2008 年度冬期国際シンポジウム　◆
「南オセチア紛争と環黒海地域の跨境政治」開催される

ランチョンのようす

3 月 5-6 日、創成科学共同研究機構総合研究棟において国際シンポジウム「南オセチア紛争と環黒海地域の跨境政治」が開催されました。これは、スラブ研究センターが、北海道大学総長室重点配分経費を受けて半年間にわたって準備してきたものです。企画の途上、一方では南オセチア戦争が起こり、問題のアクチュアリティが一層高まったこと、他方では新学術領域研究「比較地域大国論」の給付を受けたため財政基盤が強まったことから、当初構想したものよりも大規模な催しとなり、7 ヵ国から 19 人の報告者が招聘されました。その内訳は、日本とトルコが 5 名ずつ、ロシアから 3 名、イギリスとウクライナから 2 名ずつ、グルジアとアメリカから 1 名ずつです。この人数からも察せられる通り、この国際シンポは、スラブ研究者とト

ルコ研究者の共同企画であり、従来の地域研究の分業体制を壊して環黒海研究という新しい研究コミュニティを作るという趣旨にかなったものとなりました。

狭義の研究者以外に、1990 年代から 2000 年代にかけて OSCE のモルドヴァ・ミッション長だったウィリアム・ヒル氏を講師として 2 日目にランチョンをおこない、また同氏には討論者としても活躍していただきました。

今回の国際シンポジウムは、北海道大学のトレードマークのひとつである創成科学共同研究機構活性化の一環としてなされたものでもありました。建物が文系諸学部から離れたところにあるため、それだけ聴衆の数は減りましたが、その反面、ワークショップに近いような雰囲気となり、インテンシヴな議論が可能になりました。

6 つのパネルは、それぞれ「環黒海広域史研究の伝統から学ぶ」、「EU 拡大と環黒海」、「広域宗教過程」、「トルコ・ファクター」、「解凍された紛争」、「南オセチア戦争」に焦点を当てたものでした。特筆すべきは、オセチアとグルジアとロシアという戦争当事者を代表する（ただし代弁ではない）研究者が参加し、学問上の偏向を避けるだけではなく、平和構築という点でも有益な催しとなったことです。

私事になりますが、私が参加した同種の学会の中では、たとえば昨年 11 月にテヘランで開催されたコンフェレンスにはオセチアやアブハジアの研究者は招かれさえもせず、この 4 月 6 日に私がワシントンＤＣで参加したヘルドレフ出版社主催の研究会では、「あなた（松里）以外は誰もオセチアについて語りませんでしたね」と聴衆から言われました。「分け隔てなく当事者に語ってもらう」というスラブ研では当たり前のことが、世界的には例外であるような状況なのです。

ペーパーをできるだけ多く欧米査読誌で掲載してもらうため、ワシントン DC の『デモクラチザーツィヤ』誌のお目付け役として、ヘンリー・ヘイル・ジョージ・ワシントン大学教授をシンポジウムに招きました（ついでに報告もしてもらいましたが）。その後、出版元のヘルドレフ出版社ともワシントンで話したのですが、オセチア紛争と非承認国家関連の論文は、査読さえ通れば特集号としてまとめて出してもらえそうです。こうした試みは、せっかくの素晴らしいペーパーを、より読まれる形、よりプレステージの高い形で公刊するためになされるものです。なお、ジョージ・ワシントン大学は、スラブ研が推進する ITP の提携校でもあり、デイヴィス・センターやオックスフォードのアントニー校に匹敵するパートナーになりつつあります。

シンポジウムの終了後、オセチア・非承認国家関連の研究者は大阪大学へ、トルコからの研究者は一橋大学へ、ウクライナからの研究者は早稲田大学に行き、付属セミナーで報告しました。資金援助してくれた北海道大学、素晴らしい会場を提供してくれた創成科学共同研究機構に感謝いたします。［松里］

◆　第 1 回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンス開催される　◆

2 月 5-6 日、第 1 回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンス（以下、東アジア学会）が開催されました。前回のニュースでもお伝えしましたが、24 パネルが組織され、75 ペーパーが発表されました。国別では、韓国から 24、日本から 19（そのうち 6 は日本在住外国人）、中国から 16、台湾から 1、モンゴルから 1、ロシアから 3、マレーシアと米国から 1 人ずつ報告者が参加しました。これとは別に、3 国のスラブ研究の創成世代に属する和田春樹、李鳳林、ハ・ヨンチュル 3 氏が東アジアにおけるスラブ研究の黎明期の思い出と今後の展望について語りました。

ICCEES のホームページがこの催しを宣伝してくれたおかげで、アジア外からの報告希望は、

あるパネルのようす

実現されたものよりずっと多かったです。ロシアからだけで7提案、ベラルーシから1提案、マレーシアからも2提案ありました。アジア外からの参加者を資金援助する仕組みがなかったので、残念ながら、これら希望者の多くは参加を断念しました。ロシア極東やオセアニアからの参加を増やしてゆくことは、今後の課題となるでしょう。

スラブ研究センターの援助で、プログラムはネット上でも公表され、そこからペーパーをダウンロードする仕組みが作られましたが、何と75ペーパー中の69(92%)は事前に提出され、ダウンロードに付されました。これらペーパーの欧米査読誌での掲載を促進するために、『デモクラチザーツィヤ』誌からクリストファー・マーシュ・バイロン大学教授がお目付け役として招かれました。このほかにも、*Europe Asia Studies* がこの催しに大きな関心を寄せました。

歴史上最初の東アジア学会は、当初の目論見どおり、アジアのスラブ研究者の世界への貢献を増大するための飛躍台となりました。特に、韓国と上海の同僚は、2010年のICCEES世界大会（ストックホルム）に大挙して登録しました。東アジア学会に続いて、日本はストックホルムへの参加者でも韓国に追い抜かれるかもしれません。コンフェレンスの前夜に恒例の東アジア3学会長サミットが開かれましたが、慎重に話し合った結果、第2回目の東アジア学会は、2010年2～3月、ソウルで開催されることが決まりました。

今回のコンフェレンスの問題点は、まず、自発的に組織されたパネルが少なかったことです。パネルの半分以上は、個人提案を束ねてプログラム委員会が作ったものでした。それぞれに若手研究者を「オーガナイザー」として貼り付けて、パネル・プロポーザルを代筆してもらいました。私は冗談で、彼らをナカズヌィー・アタマンと呼びました。第2の問題点は、主催国・主催組織の負担が大きすぎることです。息ながくこうした行事を続けるには、当面の参加規模を大きくするための便法ではなく、主催者の負担を小さくし、パネル提案者がより大きな責任を負う放任主義（つまり、欧米の学会運営のあり方）に移行する必要があると思います。実際、二順目（つまり3年後）からはそうなると思います。

東アジア3国スラブ学会の協力については、センターニュースでも適宜お伝えしてきましたからここでは繰り返しませんが、やはり、日中韓のスラブ研究者が知り合い、コミュニティ意識を持ち、仲良しになったことが最大の成果でしょう。これは職業的な友情であり、相互刺激も大きかったと思います。たとえば、中国の同僚たちは、伝統的に、ペーパーを書くことにあまり力を割いてきませんでした。日本の研究者が「彼は、あんな報告繰り返してると、この世界でキャリアはないぜ」などと言うと驚きます。教授だろうと若手だろうと、ペーパーの1本1本が死活のテストなのだという感覚がないのです。研究者は、政府に対する政策提言がどの程度採用されたかなどの別の基準で評価されます。しかし、今回のコンフェレンスで感じたのですが、日本と交流歴の厚い中国人研究者は意識的にこの伝統を破りました。まともなペーパーさえ書けば、「中国の対中央アジア政策」のようなテーマは欧米人が喉から手が出るほど欲しい情報なのですから、欧米の査読誌に容易に載ります。逆に中国人研究者から言われるのは、日本の研究者は具体性のあるテーマを選んで良い現地調査をしているが、

高位の指導者との人脈がないということです。確かに、日本のロシア研究者で高位の指導者との人脈を重視する研究姿勢をとっているのは袴田茂樹氏くらいではないでしょうか。こうした形で互いに良いところを学び、弱いところを自覚化してゆければいいと思います。

JCREESは、基本的にアジアは若手の訓練の場であると位置づけました。ですから報告者の中で私が一番年配だったのではないでしょうか。アジアで訓練され、北米や世界に向けて飛躍するという若手育成プランそれ自体はいいと思いますが、今回主催国でありながら報告数が3国で一番少なかったという事態はあまりいいものではありません。来年はもう少し、上の世代の参加を奨励した方がいいかもしれません。ソウルは食べ物がおいしいので、それも動機になるのではないでしょうか。［松里］

◆　国際ワークショップ　◆
「スラブ・ユーラシアの地域と環境 Regional Public Sphere and Environment in Slavic Eurasia and Japan」の開催

人間文化研究機構総合地球環境学研究所（地球研）とスラブ研究センターは標記の国際研究集会を2009年2月28日（土）及び3月1日（日）の両日にわたって、総合地球環境学研究所において共催しました。開催趣旨は以下のとおりです。

おもな参加者が集まって

「旧ソ連東欧諸国（スラブ・ユーラシア諸国）は20年前の体制転換以降、社会主義に代わる経済政治体制の構築に努めてきた。その結果として市場経済化や民主化が進展したが、他方で市場経済化や民主化では十分に対処できない公共性という問題領域、つまり公共財の社会的な管理運営が注目を集めるようになってきた。しかも今日の公共財は従来公共財の典型と考えられた軍事・外交とは異なり、必ずしも国家を単位として管理運営されるのではなく、地域住民ないしNPO-NGO（民間非営利団体）の同意と参加、自治体間や国家間の調整を必要とする領域に拡大している。

これまで科研費研究「東欧のコミュニティ形成と地域公論および広域公共財」（代表：家田修、2006-08年度）では主に人文社会科学の視点からこの問題に迫ってきたが、近年、東欧およびスラブ・ユーラシア諸国においても自然環境を公共財として考え、その管理運営を求める動きが生まれている。そもそも環境を公共財として管理運営しようとする考え方は、産業化や都市化が一定の段階に達するなかで生まれた。従って環境保全は産業化＝都市化と単に負の相関関係にあるのではなく、思想的にも技術的にも相互依存関係として理解すべき側面も存在する。その意味で、第一次産業を軸とした人間社会と環境の係わりに加えて、産業化＝都市化という第三の要因を取り込むことで、人間と環境の複合的な係わりを描き出すことができるのではないかと考えられる。

2007年度より、スラブ研究センターと総合地球環境学研究所との連携研究が進展する中、「地域と環境」をテーマとして本格的な共同研究を実施する条件が整ってきた。

今回の国際ワークショップでは、地球研ですでに進行しているスラブ・ユーラシアの環境に係わる複数のプロジェクトの研究成果に学びつつ、今後の共同研究の具体的なあり方を討議することにより、文理の諸科学が今後いっそう協働できる実践的な研究体制と研究領域を作り上げることが意図される。

とりわけ昨年、日本とハンガリーの間でCO2の排出権取引に関する合意が成立し、今後、日本は環境政策でスラブ・ユーラシア諸国との関係を強めようとしている。これは本ワークショップが目指す総

合的環境研究が今後、国家的にも一層必要とされることを示している。

今回の国際ワークショップの準備および開催では以上のことを念頭に置き、スラブ･ユーラシアにおける「地域と環境」問題を総合的に研究してゆく国内的、国際的な体勢作りが始められることになる。」

この趣旨のもとに今回のワークショップでは、地球研の窪田プロジェクト、白岩プロジェクト、井上プロジェクトの協力を得て、自然科学分野と人文・社会科学分野の連携を試みるべく、下記のようなプログラムで議論が進行しました。海外からはイギリス、ロシア、カザフスタン、ハンガリー、ルーマニア、スロヴァキアから報告者が招かれました。

February 28 (Sat)

11:05-11:10 Opening Speech　秋道智彌（総合地球環境学研究所副所長）
11:10-11:20 Keynote Speech　家田修（北海道大学スラブ研究センター）

Session 1　Cross-national Eco-system and Trans-national Regulation in Amur-Okhotsk Region
CHAIR 白岩孝行（総合地球環境学研究所）
11:20-11:40 Social Indicators, Ecological Quality and Regional Development: An Example from the Transboundary Basin of the Amur River
Sergey S. GANZEY, Pacific Institute of Geography FEB RAS, Vladivostok, Russia
11:40-12:00 The *"Giant" Fish-Breeding Forest* as Global Environmental Public Goods
花松泰倫（総合地球環境学研究所）
12:00-12:30 Discussion

Session 2　Political-economic-climate Changes and Water Ecosystem
CHAIR 井上元（総合地球環境学研究所）
13:30-13:50 Historical Changes of Agricultural Development and Water Environment in the Ili River Basin, Southeastern Kazakhstan, 1936-1998
秋山知宏（愛知大学国際中国学研究センター）
13:50-14:10 The Water Problem in Central Asia and Probable Changes of Water Resources in Nearest Decades as Reaction on Climate Change and Degradation of Glaciers
Igor SEVERSKIY, Institute of Geography, Kazakhstan
14:10-14:30 Siberian Winter Roads on the Frozen River and Ponds, as Public Goods depending on the Local Environment
奥村誠（東北大学東北アジア研究センター）
14:30-15:10 Discussion

Session 3　Emerging Regional Public Sphere in Central Eastern Europe
CHAIR 窪田順平（総合地球環境学研究所）
15:30-15:50 Emerging Public Sphere in the Environmental Policy in Hungary
家田修（北海道大学スラブ研究センター）
15:50-16:10 Regional Integration and Trans-national History: Reflection on the History of Biopolitics in Central Europe
Constantin IORDACHI, Central European University, Romania
16:10-16:30 Transcending Ethnic Conceptions of Cross-Border Space
Nigel SWAIN, School of History, University of Liverpool, UK
16:30-17:10 Discussion

March 1 (Sun)

Session 4　Post-communist Public Sphere in Central Eastern Europe
CHAIR 林忠行（北海道大学）
9:30-9:50 Social Welfare in Communist East Central Europe: Structure, Functions and Dynamics
TOMKA Béla, University of Szeged, Hungary
9:50-10:10 The Pension System as Public Goods in the Czech Republic
池本修一（日本大学経済学部）
10:10-10:30 Local Communities in Transylvania in the Period of Transition
中島崇文（学習院女子大学）
10:30-11:10 Discussion

Session 5　Historical Aspects on Conceptualization of National and Public Sphere: Slovakian Case
CHAIR 長與進（早稲田大学）
11:30-11:50 The Concept of the Slovak Nation and Corporate State: The Melding of the Concepts of *Natio, Populus* and *Gens* in the Eighteenth-Century Hungary
中澤達（福井大学）
11:50-12:10 The Idea of National Identity of Slovaks in 1848-1914
Milan PODRIMAVSKÝ, Institute of History, Slovak Academy of Sciences in Bratislava, Slovakia
12:10-12:40 Discussion

Session 6　Historical Aspects on Conceptualization of National and Public Sphere: Croatian and Hungarian Cases
CHAIR 玉木修 (京都大学)
13:40-14:00 The Development of Slavic Reading Clubs and Schools in the Era of National Revival in Istria
石田信一（跡見学園女子大学）
14:00-14:20 Elementary School as Public Good for the Consumers: Local Residents and Cegléd Municipal 'Tanya' Schools in Dualistic Era Hungary
渡邊昭子（大阪教育大学）
14:20-15:20 Concluding Discussion
15:20-15:30 Closing Remarks

アムール川―オホーツク海にまたがる魚付林水域という環境を基にした地域圏の発想、中央アジアを水文学から理解すること、シベリアを冬季だけ通じる氷道から見直すこと、いずれも社会科学や人文科学を専門にしている立場から見ると、とても新鮮で、新しい世界が開けてくるようでした。反対に自然文化環境を統合して公共圏 public sphere から理解しようとする社会科学から自然科学者への提案は、まだまだおおいに工夫が必要であることがわかりました。

ともあれ今後の地球研とスラ研との本格的な連携の第一歩は確実に踏み出されました。スラブ・ユーラシアにとって環境問題は今後重要性を増していくことはあっても、減ずることはないと思います。皆様からのご意見、ご提案をお待ちしております。［家田］

◆　公開講座《世紀を超えて：東欧革命後の 20 年を振り返る》まもなく開講　◆

今年度の公開講座は東中欧地域をテーマにしました。2009 年は東欧革命後 20 年という節目の年にあたります。半世紀続いた社会主義体制が脆くも崩壊し、その結果平和的にあるいは戦争を経て分裂する国家も現れ、また後に多くの国家が EU や NATO に加盟しヨーロッパの再編が進むなど、まさに激変でありました。分裂と再統合の間で、国家や民族のアイデンティティが問い直され続けた 20 年と言えるでしょう。

本講座では、この節目の年を機として、激動の 20 年間を言語や文学といった地域研究の基礎分野から、地域の枠を超えて今日最も議論が盛んにおこなわれている環境問題にいたるまでの様々な切り口で東中欧の変容を総括し、具体的な事例をもとにその変化の意味を改めて考えることを目標とします。

日程、講義題目、講師は以下の通りです。［野町］

日　　程		講　義　題　目	講　　師
第 1 回	5 月 11 日（月）	変わる政治： EU 加盟は東中欧政治にどのような影響を与えたのか？	林忠行（センター）
第 2 回	5 月 15 日（金）	変わる宗教世界：キリスト教 2000 年と共産主義	新免光比呂（国立民族学博物館）
第 3 回	5 月 18 日（月）	変わる経済地図：比較経済後進性論の視点から	上垣彰（西南学院大学）

第 4 回	5 月 22 日（金）	変わる環境問題：ドナウ川ダム建設問題とその行方	家田修（センター）
第 5 回	5 月 25 日（月）	変わる東欧文学：21 世紀の世界文学に向けて	沼野充義（東京大学）
第 6 回	5 月 29 日（金）	変わる歴史認識：歴史修正主義の諸問題	柴宜弘（東京大学）
第 7 回	6 月 1 日（月）	変わる言語地図：「多言語化」するスラブ世界	野町素己（センター）

◆ ITP《博士号取得後のスラブ・ユーラシア研究者の能力高度化プログラム》の初年度を振り返って ◆

スラブ研究センターが実施組織となっている国際トレーニング・プログラム（ITP）「博士号取得後のスラブ・ユーラシア研究者の能力高度化プログラム」の初年度が終わりました。英語論文執筆講習会（5 ～ 6 月）など年度前半の行事についてはすでにニュースでもお伝えしてありますし、ITP 派遣者の国際学会での活躍などは ITP ホームページに適宜掲載されていますから、ここでは主に年度末の活動について紹介します。

今年 2 月 5 ～ 6 日におこなわれた第 1 回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンスにおいて、ITP 参加者のうち 13 名が報告しただけではなく、パネルの組織などでも貢献しました。こうして日本の若手スラブ研究者は東アジア研究者コミュニティ形成の先頭に立つと同時に、国際学会への参加のノウハウを学びました。従来、アジアの若手研究者には、国内レベルでの研究発表と世界・全米レベルでの研究発表との間に水準の格差や語学障壁があり、なかなか国際的に飛躍できないという構造的な問題がありました。これは、まずはヨーロッパ地域学会で英語で発表する訓練を積むことができる欧州大陸の若手研究者と比して、アジアの若手研究者が出遅れる原因でした。東アジアにおけるスラブ研究コミュニティの成立は、この障壁を克服するものです。

昨年度、東アジア・コンフェレンス以外にも、5 月にウラジオストクで開催された国際若手ワークショップ（日本の若手から 5 名が報告）が若手の国際的な報告数を増やしました。ITP 派遣者はもとより、それ以外の多くの ITP 参加者が、2009 年の全米スラブ学会（AAASS）、2010 年の世界スラブ学会（ICCEES）に向けて報告・パネルを登録しました。

こうした中で、国際査読誌に投稿する習慣が若手研究者に広まりました。ITP 派遣者はそもそも投稿が義務ですから、彼らが書いた 3 本が査読中です。これを除いてさえ、昨年度だけで 6 本、*Modern Asian Studies, Journal of Religion and State* をはじめとする国際査読誌が、ITP 若手が書いた論文を採択しました。そのほか 5 本が査読中です。日本の文科系においては、大学院生ましてや 20 歳代のうちから欧米の査読雑誌に業績を発表する習慣はあまりなかったので、これは大きな変化です。以前、「国際的査読雑誌にコンスタントに書く若手スラブ研究者を今後 5 年間で 20 人育てる」と私がある場所で発言したところ、ある有名な日本人教授が「海外査読雑誌などそんなに簡単に通るものか。あなたは『採択』と『投稿』を言い間違えたのではないか」とコメントしました。しかし、上記の目標を達成するのにどうやら 5 年も要らないようです。とはいうものの、ウラジオや札幌で報告された膨大な数のペーパーがまだ投稿前なのですから、若手の皆さんには、これらを確実に論文にし、投稿するよう頑張ってほしいと思います。

ITP 派遣者は、派遣先と協力して、セミナー等を組織しました（本号掲載の望月エッセイも参照）。これは、自分の研究発表をそつなくこなすだけではなく、外国でイヴェントを組

乗松、平松両氏が企画したセミナーの参加者

織できるような企画力と語学力を身につけるというITPの趣旨に基づいた課題です。これらの企画は、派遣先で大いなる好感を持って受け止められ、スラブ研究センターに謝意が寄せられました。たとえば、この4月初旬、私はワシントンDCのヘルドレフ出版社が組織した南オセチア戦争関連の企画に招かれましたが、GWUの欧・露・ユーラシア研究所のホープ・ハリソン所長（冷戦研究者）が、私が報告したセッションだけわざわざ聴講して、それが終わった後にITPで杉浦史和氏を派遣したことに、こちらが恐縮するほどの丁寧な謝意を表明されました。ハリソン所長は今夏に任期が切れますが、後を継ぐことになっているヘンリー・ヘイル教授からも、研究所の質を上げるためには優秀な外国人フェローが来てくれることが非常に大切だということで、（やれハーヴァードだオックスフォードだといわず？）ワシントンDCに優秀な若手をITPから送るよう念を押されています。

ここでITP派遣者が派遣先で組織した企画を紹介すると、オックスフォード大学アントニー校に派遣された乗松亨平、平松潤奈氏は、3月15日、セミナーCultural Creation of “Russian Reality”を組織しました。

10:00-11:30	**Panel 1: Reality of Socialist Realism (I)** Chair: Catriona Kelly, Oxford U Sandra Evans, Tübingen U, Germany “The Creativity of Rubbish or the Reality of Ambivalence in the Communal Apartment” Monica Rüthers, Basel U, Switzerland “Socialist Living in the New Family Home of the Khrushchev Era”
12:00-13:30	**Panel 2: Reality of Socialist Realism (II)** Chair: Andrei Zorin, Oxford U Mikhail Ryklin, Humboldt University of Berlin, Germany “‘The Best in the World’: Discourse of Metro, Discourse of Terror” Junna Hiramatsu, Oxford U “Mimetic Representation and Violence in Stalinist Culture: The Case of M. Sholokhov”
15:00-17:30	**Panel 3: Colonial Reality in the Russian Empire** Chair: Mark Bassin, Birmingham U, UK Kyohei Norimatsu, Oxford U “The Dispute over ‘Russian Orientalism’ in the Mirror of Bestuzhev-Marlinsky’s Ammalat-bek (1832)” Susan Layton, Edinburgh U “Russian Tourism, Nationalism, and Social Identity: Representations of Self and Other in the Early Reform Period” Dany Savelli, Toulouse U, France “Colonizing Shambhala: From the Usurpation of a Buddhist Myth to a Usurpation of Identity (the Roerich Expedition in Central Asia – 1924-1928)”

ジョージ・ワシントン大学に派遣された杉浦史和氏は、3月5日、ランチョン・セミナーDynamics of Business: Government Relations in Russia: Before and after the Crisisを組織しました。報告者は、杉浦氏（“Reemergence of Wage Arrears in Russia: Implications and Possible Consequences to the Business – Government Relations”）と、この企画のためモスクワの高等経済

大学から招かれたアンドレイ・ヤコヴレフ氏（“The Model of Russian Firms during and after the Crisis”）でした。

ハーヴァード大学デイヴィス・センターに派遣された半谷史郎氏は、1 月 30 日、セルゲイ・ラドチェンコ氏（LSE）をロンドンから招いて冷戦研究セミナーを組織しました。ラドチェンコ氏は “Soviet Koreans, East Asia, and the End of the Cold War” という題で報告しました。さらに、3 月 11 日には、日本から望月哲男氏を招いて、“Perceptions of Dostoevsky and Tolstoy in Contemporary Russia and Japan” について報告するセミナーを組織しました。

このように、すでに国際級の実力を持つ若手研究者の活動を援助すると同時に、2、3 年後の ITP 参加候補者を開拓するため、2009 年 3 月 23 ～ 26 日、修士課程院生も対象にした学術英語強化コースを北海道大学でおこないました。このためのネイティヴ講師の派遣は英会話学校ベルリッツに依頼しました。20 名の参加があり、レベルに応じて 3 つのグループに分かれ、国際的なプレゼンテーション能力の向上を目指しました。

総じて ITP の初年度は、日本のスラブ研究史上の転機と呼んでも誇張でないような成功をおさめました。しかしこれは、ITP の成功というよりも、実力のわりには国際貢献の意識が薄かったこれまでの日本の研究のあり方があまりにも不自然であったということの反映ではないでしょうか。業績発表の国際化に抵抗する一部の日本人文系研究者の論拠として、「ある分野で日本の研究水準が国際水準を上回っている場合、英語で業績を発表する必要などない」というものがあります。これは奇妙な論理であり、もし本当に「ある分野で日本の研究水準が国際水準を上回っている」のであれば、海外の同僚の成長を助けるために、日本人はますます英語で書かなければならないはずです。以上の反面、ITP が急速に発展したのは、内容面で日本の研究が国際的な水準に到達しているからであることは忘れてはならないでしょう。能動言語の習熟は、膨大な「読む」作業を代替しません。話し書く内容が実際に面白いからこそ、外国語で発表する価値があるのではないでしょうか。［松里］

◆　センター共同研究員　◆

2009-10 年度のセンター共同研究員の委嘱が、下記の 151 名の方々になされました。（敬称略、所属の五十音順）［岩下］

1. 特別共同研究員　25 名

皆川修吾（愛知淑徳大）、平井友義（大阪市立大名誉教授）、長谷川毅（カリフォルニア大）、井上紘一（関西外国語大）、高田和夫（九州大）、木村崇（京都大名誉教授）、加藤九祚（国立民族学博物館）、松田潤（札幌大）、宇多文雄（上智大）、木村汎（拓殖大）、百瀬宏（津田塾大）、岩田昌征（東京国際大）、和田春樹（東京大名誉教授）、西村可明（一橋大名誉教授）、中村喜和（一橋大）、南塚信吾（法政大）、原暉之（北海道情報大）、栗生澤猛夫（北大名誉教授）、竹田正直（同）、荒又重雄（同）、望月喜市（同）、川端香男里（東京大名誉教授）、佐藤經明（横浜市立大名誉教授）、伊東孝之（早稲田大）、安井亮平（早稲田大名誉教授）

2. 学内共同研究員　25 名

天野哲也（総合博物館）、吉野悦雄（経済学研究科）、中村研一（公共政策学連携研究部）、吉田文和（同）、佐々木隆生（同）、長南史男（農学研究院）、柿澤宏昭（同）、安藤厚（文学研究科）、池田透（同）、煎本孝（同）、浦井康男（同）、高幣秀知（同）、津曲敏郎（同）、望月恒子（同）、大西郁夫（同）、加藤博文（同）、佐々木亨（同）、遠藤乾（法学研究科）、宇佐見森吉（メディア・コミュニケーション研究院）、杉浦秀一（同）、山田吉二郎（同）、橋本聡（同）、所伸一（教育学研究科）、小野有五（地球環境科学研究院）、江淵直人（低温科学研究所）

3. 学外共同研究員　96 名

袴田茂樹（青山学院大）、大野成樹（旭川大）、石田信一（跡見学園女子大）、渡邊昭子（大阪教育大）、藤本和貴夫（大阪経済法科大）、大津定美（大阪産業大）、前田弘毅（大阪大）、山根聡（同）、小田福男（小樽商科大）、中島崇文（学習院女子大）、橋本伸也（関西学院大）、松井康浩（九州大）、石田紀郎（京都学園大）、帯谷知可（京都大）、三谷惠子（同）、松井憲明（釧路公立大）、横手慎二（慶応義塾大）、塩原俊彦（高知大）、佐々木史郎（国立民族学博物館）、澤田和彦（埼玉大）、塚崎今日子（札幌大）、鈴木淳一（同）、吉田世津子（四国学院大）、廣瀬陽子（静岡県立大）、西山克典（同）、六鹿茂夫（同）、輪島実樹（ロシア NIS 貿易会）、上野俊彦（上智大）、志摩園子（昭和女子大）、中野潤三（鈴鹿国際大）、上垣彰（西南学院大）、仙石学（同）、富田武（成蹊大）、本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、松井弘明（大東文化大）、秋山晋吾（千葉大）、新免康（中央大）、吉岡潤（津田塾大）、五十嵐徳子（天理大）、中見立夫（東京外国語大）、永山ゆかり（同）、吉村貴之（同）、篠原琢（同）、小森田秋夫（東京大）、小松久男（同）、沼野充義（同）、柴宜弘（同）、中井和夫（同）、渡邊日日（同）、川島真（同）、塩川伸明（同）、森本一夫（同）、石井明（同）、栗原成郎（同）、月村太郎（同志社大）、諫早勇一（同）、北川誠一（東北大）、平田武（同）、高倉浩樹（同）、寺山恭輔（同）、中澤敦夫（富山大）、根村亮（新潟工科大）、池田嘉郎（新潟国際情報大）、小澤治子（同）、池本修一（日本大）、栖原学（日本大授）、岡奈津子（アジア経済研究所）、濱本真実（人間文化研究機構イスラーム地域研究東京大学拠点）、菅原淳子（二松学舎大）、中地美枝（ハーバード大）、岩崎一郎（一橋大）、久保庭真彰（同）、岩田賢司（広島大）、ベロフ・アンドレイ（福井県立大）、中澤達哉（福井大）、湯浅剛（防衛研究所）、下斗米伸夫（法政大）、田口晃（北海学園大）、松戸清裕（同）、川口琢司（同）、佐原徹哉（明治大）、豊川浩一（同）、田畑朋子、秋月俊幸、中村唯史（山形大）、大須賀史和（横浜国立大）、中村靖（同）、山下範久（立命館大）、坂井弘紀（和光大）、野田仁（早稲田大）、唐亮（同）、高尾千津子（同）、長與進（同）、井桁貞義（同）、伊東一郎（同）、貝澤哉（同）

4.COE 共同研究員　5 名

青島陽子、荒井幸康、飯尾唯紀、井澗裕、藤森信吉

◆　専任研究員セミナー　◆

ニュース前号以降、以下の専任研究員セミナーが相次いで開かれました。

1 月 22 日：**林忠行**「東中欧諸国における政党システム形成の比較：「基幹政党」の位置取りを中心にして」　センター外コメンテータ：平田武（東北大）

3 月 3 日：**望月哲男**「『アンナ・カレーニナ』（光文社古典新訳文庫）解説」
センター外コメンテータ：木村崇（京大名誉教授）

3 月 19 日：**野町素己**「カシュブ語の「受容者受動」とその文法化をめぐって」
センター外コメンテータ：ロムアルド・フシチャ（ワルシャワ大・ヤゲロー大）

3 月 27 日：**宇山智彦**「グルジア紛争後の中央ユーラシアにおける国際関係：小国のバーゲニング・パワーの重要性」　センター外コメンテータ：吉村貴之（東京外国語大）

4 月 2 日：**家田修** “Emerging Public Sphere in the Environmental Policy in Hungary”
センター外コメンテータ：窪田順平（総合地球環境学研究所）

4 月 8 日：**長縄宣博**「帝政ロシア末期のワクフ：ヴォルガ・ウラル地域と西シベリアを中心に」
センター外コメンテータ：磯貝健一（京都外国語大）、磯貝真澄（神戸大院生）

林報告は、1990 年代以降のポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーの基幹政党（与党第一党になったことのある党）を、「経済保護主義／経済自由主義」、「世俗・普遍主義／保守・ナショナル」という 2 つの軸で分類し、国ごとの政党システム形成の経路を分析するものでした。討論では、これらの国で有権者の意見分布がほぼ決まっていて、しかも政党が自由に立ち位置を変えられるのはなぜなのかなどが議論されました。いつもながらのクリアな整理がなされた論文でしたが、もっと人間的要因に注目する余地もあるのではないかという意見も出ました。

望月報告は、読みやすいと評判の『アンナ・カレーニナ』新訳の解説部分で、通常の専任セミナーのペーパーとはやや性格が異なりますが、トルストイ研究の成果を豊富に盛り込んだ巧みな作品解説でした。出席者一同もそれぞれの文学観を披瀝して盛り上がり、文学者の少ないスラブ研にも実は文学好きが多いのだと気づかされました。

野町報告は、ポーランド北部の少数言語であるカシュブ語において、他のスラヴ語には稀な種類の受動構文が使われることに着目し、これがドイツ語からの借用であることを示した上で、この構文の文法的・意味的特徴を分析するものでした。多くの出席者にとっては慣れない分野の報告で、論文の書き方の「文化」の違いを考えさせられましたが、この構文が本当にドイツ語からの借用なのかなどについて、活発な議論がなされました。外国人コメンテータが日本語で高度な専門的議論をしたのも、普段のセミナーには見られないことでした。

宇山報告は、南カフカス三国での短期間の聞き取り調査に基づいて、グルジア紛争が各国にとって持った意味の違いを論じ、中央アジアからの米軍基地撤退などにも触れながら、現代世界の国際関係が大国の政策だけではなく、小国の大国に対するバーゲニング行為によっても動かされていることを論じました。この視点は、歴史研究としての帝国論の援用でもあります。報告者が注目するアルメニアとトルコの関係改善については、多くの困難があるとの指摘がコメンテータから出されました。

家田報告は、報告者がこれから取り組もうとしている、東欧の環境に関する文理連携研究への意気込みを示すもので、ドナウ川のダムや地下水をめぐるハンガリーとスロヴァキアの対立や、環境 NGO への国際的支援など、多様な話題を扱いました。コメンテータにより水問題研究に関する明解な説明がなされたあと、他の出席者から、旧ソ連との比較や、公共圏という概念の使い方の妥当性などが議論されました。

長縄報告は、ワクフ（慈善を目的とした財産寄進制度）を通して、ヴォルガ・ウラル地域における国家と社会の関係という報告者の一貫したテーマを論じると同時に、イスラーム世界におけるワクフ研究全般への貢献も意識した野心作でした。コメンテータによって、ワクフ制度一般の中で何がヴォルガ・ウラル地域の特徴なのかについて整理がなされたあと、他の出席者から、国家と社会の交渉とは言っても結局は専制国家の枠内の話なのではないか、などの意見が出されました。［宇山］

◆　非常勤研究員セミナー　◆

3 月 26 日に非常勤研究員セミナーが開かれ、以下の報告がおこなわれました。

木山克彦「ロシア沿海地方の渤海土器」　コメンテータ：臼杵勲（札幌学院大）

この報告は、多くの論考が出されながらも基礎的な整理が十分なされていない渤海土器について、年代と地域差を緻密に分析するものでした。多くの出席者にとって考古学はなじみのない分野で、コメントに苦しむ姿も見られましたが、中国や韓国の歴史論争で政治的に扱われがちな渤海について、基礎的・技術的な作業を堅実に進めようという姿勢は好意的に受

け止められました。［宇山］

◆　研究会活動　◆

1 月30 日　Zh. アブルホジン（歴史・民族学研究所、カザフスタン）「カザフスタン近代化の歴史的経験：ロシア帝国（植民地）期、ソ連期、ポストソ連期（ロシア語）」（センターセミナー）

2 月10 日　R. ティシュキェヴィッチ（在日ポーランド共和国大使館）「国際関係における活動的なアクターとしてのポーランド」（北海道スラブ研究会）
渡辺圭（千葉大・院）「府主教フィラレート・ドロズドフと『イエスの祈り』：カテキズムに見る静寂主義の影響」（鈴川・中村研究員報告会）

2 月17 日　高尾千津子（早稲田大）「ユダヤ近現代史へのロシアの影響」（センターセミナー）

2 月18 日　廣瀬陽子（静岡県立大）「グルジア紛争の多面的分析とそのコーカサス地域への影響」（センターセミナー）

2 月27 日　宇山智彦（センター）、長縄宣博（同）「出張報告：インドの国際学会と南カフカスの現地調査」（昼食懇談会）

3 月7-8 日　亀山科研・望月科研合同セミナー「ソ連文化と記憶の問題をめぐって」　高橋沙奈美（北大・院）「ポスト・スターリン社会の宗教と伝統をめぐる語り：A. タルコフスキーの『アンドレイ・ルブリョフ』に寄せて」；後藤正憲（センター）「ゲンナジー・アイギと翻訳の行為について」；扇千恵（同志社大）「テンギス・アブラーゼ監督の『懺悔』を観る」；亀山郁夫（東京外国語大）「引用と告白の彼方に：ショスタコーヴィチの交響曲第 15 番（1971）について」

3 月 9 日　村知稔三（青山学院女子短大）「19 世紀末ヴォルガ中流域の農村における乳幼児の生活と夏季保育所」（センターセミナー）

3 月10 日　A. レンナー（ケルン大、ドイツ）“Lost in Transition. Russian and Soviet Travelogues, 1900-1960”（センターセミナー）

3 月13 日　G. キム（カザフ国立大）「中央アジアの朝鮮：民族的アイデンティティと意識の変容」（北海道スラブ研究会）

3 月14 日　「プラトンとロシア」研究会　兎内勇津流（センター）「D.A. トルストイの宗教観」；下里俊行（上越教育大）「ニコライ・ナヂェージヂンにおけるキリスト教的プラトン主義の全体構造とその特質」；北見諭（神戸外国語大学）「ロースキーの直観主義とベルクソン哲学」；貝澤哉（早稲田大）「バフチンのドストエフスキイ論とロシア・プラトニズムのコンテクスト」；杉浦秀一（北大）「フーコー、プラトン、ロシア」

3 月19 日　R. フシチャ（ワルシャワ大、ポーランド）「政治と文法：社会記号論によるポーランド語敬語諸相」（センターセミナー）

3 月23 日　石井明（センター客員教授）「中越国境の烈士陵園：中越戦争 30 周年に思う」（センターセミナー）

3 月26 日　伊藤庄一（環日本海経済研究所）「ロシアの対北東アジアエネルギー外交：現況と展望」（北海道スラブ研究会）

4 月16 日　野町素己（センター）「スラヴ語研究の位置づけと展望：モスクワとイギリスの学会に参加して」（昼食懇談会）

人事の動き

◆ 2009 年度の非常勤研究員 ◆

草野佳矢子さん

前田しほさん

センターでは、若手研究者の雇用による共同研究の推進を目的として、非常勤研究員の公募がおこなわれました。3 月 16 日の締め切りまでに 8 名の応募があり、慎重な選考を経て、草野佳矢子さんと前田しほさんの 2 名が採用されました。

草野さんは 1970 年生まれ。神戸大学を卒業後、1993 年に早稲田大学大学院文学研究科の修士課程に入学、史学・西洋史を専攻しました。1996 年に博士課程に進学、モスクワ国立大学歴史学部留学を経て、2002 年 3 月に同課程を単位修得退学。早稲田大学文学部助手、日本学術振興会特別研究員、西洋史関連科目の非常勤講師等を務め、4 月 20 日付でセンターに赴任しました。

研究分野はロシア近代史で、帝政ロシアの地方統治、地方自治を中心に、19 世紀末から 20 世紀初頭の内務省の政策に関する論考を発表してきました。センターでは、帝政ロシア政府の内政政策や行政組織についての研究を進めることをめざすようです。

前田さんは 1976 年生まれ。富山大学を卒業後、1999 年に北海道大学大学院文学研究科の修士課程に入学、ロシア文学を専攻しました。2001 年に博士課程に進学、2006 年 3 月に望月恒子教授の指導下で博士号を取得しました。室蘭工業大学、札幌大学等でロシア語の非常勤講師を務め、4 月 13 日付でセンターに赴任しました。

研究分野は現代ロシア文学、ポストモダニズム、ソビエト非公認芸術・文学、フェミニズム・ジェンダー研究等多岐にわたっていますが、特にロシアの現代女性作家ナールビコワについての論考を中心に発表してきました。センターでは、ナールビコワ研究を深めるほか、20 世紀ロシアの女性のアイデンティティの形成と自己表現に関心を広げているようです。[編集部]

◆ 2009 年度の客員教授 ◆

公募していました客員教授は審査の結果次の 6 名の方々にお願いすることになりました。[編集部]

氏名	所属	研究テーマ
伊藤　庄一	環日本海経済研究所	世界金融危機発生後のロシア・エネルギー戦略：対北東アジア政策の再構築
塩原　俊彦	高知大学人文学部	行動経済学的アプローチに基づくロシア分析：「腐敗」研究のための序説
志摩　園子	昭和女子大学大学院　生活機構研究科	ヴェルサイユ体制期の小国ラトヴィヤの研究：冷戦終焉後の新国際秩序の歴史的背景として
高尾　千津子	立教大学文学部	跨境論によるロシア・ユダヤ近現代史の可能性
鳥山　祐介	千葉大学文学部	18 ～ 19 世紀ロシアにおける風景の認識
村知　稔三	青山学院女子短期大学	1930 年代以降のロシアにおけるユニバーサルな保育制度に関する研究

旅順ソ連軍烈士陵園参観記

石井　明（東京大学名誉教授　2008 年度センター客員教授）

写真 1　ソ連軍烈士記念塔

中国遼寧省の遼東半島の先端に位置する旅順にソ連軍烈士陵園がある。面積 48,000 平方メートル。中国で最大の外国人墓地だ。筆者が東アジアで見てきた限りでは、外国兵を祀った陵墓としては、太平洋戦争時、フィリピンで戦没した米国兵を弔ったマニラの墓地と並びたつ広さだ。

実は 2 年前、2007 年 2 月にも旅順に調査に行ったことがあるのだが、その時はソ連軍烈士陵園は外国人には開放していない、と参観を断られた経緯がある。この陵園に限らず、当時は参観禁止となっているところが多かった。昨年、旅順の開放が進んだと聞き、今年 3 月、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の分担金を使って大連・旅順にでかけた。烈士陵園を参観したのは 3 月 15 日。入場料は 10 元だった。

陵園の正門の前にソ連軍烈士記念塔がある（写真 1）。1945 年、ソ連が日本に宣戦し、中国東北解放のために戦った際、犠牲となったソ連軍将兵を讃えるため建てたもので、もともとは大連市の中心部、スターリン広場にあった。1951 年に建設を始め、1955 年完成。石碑に刻まれた追悼文「永恒的光栄」（栄光はとこしえに）は郭沫若の肉筆だそうだ。10 年前、1999 年、大連の建市 100 周年の際、中国当局はこの塔を 30 キロ以上も離れた陵園正面に移し、ついでに広場の名も人民広場と変えてしまった。東北各地にソ連軍烈士記念塔はあり、高さはハルビン駅頭の記念塔の方が高いのではないか、という印象を持ったが、こちらの記念塔ははるかに横幅がある。移転は難事業だったのではないだろうか。移転前、ロシア、ウクライナ、ベラルーシなどの了解は取ったそうだが、中国のロシアに対する微妙な感情が窺える。

写真 2　ソ連軍烈士陵園正門

この記念塔が移転してきたおかげで、陵園の正門（写真 2）が小さく見えてしまう。中に入ると、陵園のガイドの詰め所があり、陵園について簡単な説明をしてくれる。まず正門の左側の一角が「飛行員墓」だ（写真 3）。ガイドも、朝鮮戦争で死んだ飛行員の墓だといって、墓石の上部に刻まれた飛行機に注目するよう促した（墓に飛行機が刻まれているのは一部だけで、むしろない方が多かったが）。

写真 3　飛行員墓の一角

旧ソ連は公式には朝鮮戦争の参戦国ではない。しかし、空軍を派遣して支援したことは衆知の事実で、内戦以来のソ連赤軍の戦死者の統計集にも、朝鮮に空軍を派遣して、戦死者 299 名（内、将校 138、下士官・兵 161）を出したことが記載されている。不謹慎のそしりを免れないであろうことは承知しているが、筆者は墓石に亡くなった日付が刻まれていることを期待していた。米空軍との戦闘の状況を考えるうえで参考になるからである。日付が刻まれていたのは 1953 年の大部分の戦死者だけで、他の年の戦死者は没年しかわからなかった。墓には氏名と生年と没年が刻まれていたが、朝鮮戦争と関連付けられる文言はない。但し、写真 3 のように墓の下部に「友の戦いのために死んだ」と刻まれた墓や、「友と同志の戦いのために死んだ」と刻まれた墓が一部にある。わずかに「友」や「同志」という表現の中に国際主義的任務を果たす途上、亡くなったことが示唆されているだけだ。

筆者の取ってきたメモを整理すると、「飛行員」のブロックの墓の数は 80 で、1950 年の戦死者が 7、51 年も 7 、52 年が 40、53 年が 26 であった。この数字からは、ソ連空軍が朝鮮戦争が勃発した 1950 年から米空軍との戦闘に加わっていたこと、1952 年が戦闘が激しかったことをうかがい知ることができる。

1953 年の墓の多くは戦死の日付が入っており、7 月 27 日の休戦協定成立を控えた 6，7 月も戦死者が出ているのが目立つ。6 月 24 日も 1929 年生まれの若い兵士が戦死しているのだが、『当代中国空軍』（中国社会科学出版社　1999 年）でも、同日、中国の「志願軍空軍」と「友空軍」（中国東北の防空作戦支援のためソ連が派遣した航空兵力を中国側はこう呼んだ）が米空軍と戦ったことが記載されている。中朝国境の鴨緑江にかかる大橋を破壊するため、同日、米空軍 100 機あまりの編隊が攻撃をかけてきた。志願軍空軍第 6 師団 16 連隊、第 15 師団 45 連隊、第 4 師団 12 連隊は命を受け、32 機で飛び立ち、「友空軍」とともに反撃した。志願軍空軍は鉄山地区（新義州の南方、海岸沿い）で米空軍の援護飛行機群（爆撃機を援護していた F-86 の編隊であろう）と遭遇し、激烈な空中戦を演じたというのだ。おそらく、この時の戦闘で戦死したのであろう。休戦協定成立の半月前、7 月 12 日死去という軍人もいる。

ソ連空軍機が米空軍機と死闘を繰り広げた北朝鮮の西北部（中朝国境の新義州から新安州にいたる地域）は、西側では Mig Alley（ミグ横丁）と呼ばれた。主としてここでの戦闘でソ連軍将兵 299 人が戦死し、その内、80 人が旅順の烈士陵園に葬られているわけだ。協定成立後の 9 月、10 月に亡くなった者の墓もある。あるいは戦闘中、負傷して、それが原因で後日、亡くなったのかもしれないが、はっきりした理由はわからない。

ところで、この陵園は朝鮮戦争の戦死者だけが葬られているわけではない。正門から向って「飛行員墓」の右側に「紅軍墓」がある。中華人民共和国建国後、旅順に駐留していた将兵及びその家族の墓と考えられる。枯れ草や雑木に覆われている墓もあり、また風雪にさらされて判読が難しい墓もあった。そういう墓は指の感触で没年を確定しようとしたので、やや不正確かもしれないが、小生のメモを整理すると、個人の墓については 1950 年没が 1 、51 年が 2、52 年が 56、53 年が 72、54 年が 45、55 年が 4 あり、没年不明が 12 あった。メモに

は1957年11月11日没の墓が1つという記述が残っていたが、ソ連軍は1955年5月26日、旅順から撤退を完了しているので、これは写し間違いかもしれない。この他、合葬の墓が7つあり、52年に7人合葬した墓が4つあったが、弔った年も人数も確認できなかった墓が3つあった。結局、墓の数が200、葬られているのが少なくても227ということになる（葬られている人数が確認できない合葬墓については2人と計算して）。

「飛行員墓」と「紅軍墓」の先に進むと、「ソ軍墓地」があり、1945年の対日戦時及びその後の旅順駐屯時に亡くなった兵士・家族の墓が葬られている。そのやや先のちょうど陵園の中心にソ連軍烈士塔がある。高さ15メートル。1955年に作られたものだ。参観を終え、帰り際にガイドの詰め所で1元で買った陵園紹介のパンフによると、1945年以降、亡くなった軍人とその家族2030人（軍人1408人、その家族622人）が1323の墓に眠っている。

しかし、この陵園にはさらに奥がある。日露戦争時、戦死したロシア軍将兵14,873人の遺骸が葬られている。また、この陵園はもともとはロシア人墓地として作られたもので（ロシアは旅順を1898年に租借地としていた）、ロシア正教徒の墓もあれば、プロテスタントとおぼしきキリスト教徒の墓もあり、小さな教会として使われていた建物も残っている。

さて、旅順からソ連軍が撤退することが決まったのが、1954年9月末のフルシチョフの訪中時で、翌55年5月31日以前に撤退することを約した。フルシチョフは北京からの帰途、旅順に立ち寄り、日露戦争の戦跡を視察したが、その際、ロシアの将兵の勇敢さを讃え、ツァー政府の腐敗を攻撃した。その直後、旅順のソ連軍は旅順の人民政府に、日露戦争記念塔や日露戦争時のロシア海軍の提督マカロフ記念塔などを作りたい、費用はソ連側が負担し、彫刻した像はモスクワから運んでくると伝えた。周恩来は、我々の領土に日露戦争の人物を記念する建築物を建設することには同意できない、として、レーニンの日露戦争評価を引き合いに出し、中国の土地で2つの帝国主義が戦った戦争においてどちらかが正しく、記念に値すると考えるわけにはいかない、とソ連大使に通告した。その代わりに建てたのが、この陵園の真ん中にあるソ連軍烈士塔であり、旅順の新市街のソ連軍勝利塔であり、旅順博物館正面の広場の中ソ友誼塔であった。

ソ連軍勝利塔も中ソ友誼塔も参観できたが、前者は1955年3月、日本帝国主義に戦勝し、反ファッショ戦争に勝利した10周年を記念して建てたもので、高さは45メートルと記されていた。後者は1955年2月、定礎式を行い、題字は周恩来自ら書いた、と記されている。1956年10月、完成し、1957年2月、落成式典が行われた、とあったが、大理石をふんだんに使った立派な建造物だ。後にソ共中央は、中国側に、日露戦争に関係する記念物を建設しないという決定を下したと伝え、さらに中国がソ連軍烈士塔、ソ連軍勝利塔、中ソ友誼塔を建ててくれたことに感謝した、という。前述の、大連からはるばる運んできたソ連軍烈士記念塔を含め、旅順の青い空に聳え立つこれらの記念塔をみていると、中ソ友好の時代にすでに双方の間に微妙な感情のずれが生じていたことに思いを致さざるをえない。

ITPの場をめぐって：ハーバード、オックスフォード訪問記

望月哲男（センター）

3月9日から20日にかけて、ハーバード大学とオックスフォード大学を駆け足でめぐる旅行を行った。出張の趣旨は、新学術領域研究「ユーラシア地域大国」の遂行にあたって、アメリカやイギリスの関連研究者の関心を喚起し、協力を要請するというものだったが、もう

ひとつ別の目的もあった。いずれの大学も2008年度インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP）派遣研究者の方々がいる場所で、初年度の終わりにその健闘ぶりを拝見し、ついでに受け入れ側の事情などもうかがってきたいと思ったのである。

ハーバードでの訪問先は、ロシア･ユーラシアの研究が専門のデイヴィス･センター。スラブ研究センターから客員研究員として滞在中のウルフ教授の案内で、まず数年前に新築された同センターのたたずまいを見学した。前回2000年に訪問したときとは場所も趣もかわった現代的なデザインのビルになっており、ライシャワー氏創立の日本研究センターも同居しているせいで、ソ連期の資料展示と日本式ミニ庭園などが混じっている感じが大変面白い。ITPで滞在中の半谷史郎さん、ウルフ教授夫人の中地美枝さんも、同じ建物内の研究室を利用しているが、それぞれ大変明るく、働きやすい環境に見えた。ご多忙の中、時間を割いてくれた所長のティモシー・コールトン氏は、スラブ研が行おうとしている新学術領域研究ほかの活動に興味を示し、両研究所の協定が現実的な実を結ぶことへの期待を表明していた。ITPプロジェクトについても、今年度の経験を踏まえてポジティヴな見方をしてくださっているようで、今後の推進に関しても、積極的な提言を持っているようにうかがわれた。昨年からの経済状況の悪化はアメリカの大学をも直撃しているが、そうした中で活動の質を維持することが、研究センターのリーダーの大きな課題となっていることが感じられた。

セミナーの様子、右から3人目が筆者

11日にはウルフ教授のご努力で、両センターが共催という形式のセミナーを行うことが出来た。文学専門の筆者は、社会科学系のセンターでの報告テーマに迷った結果、「現代ロシアと日本におけるドストエフスキー、トルストイの受容」という概説的な話を行ったのだったが、幸いコールトン所長をはじめ、ロシア文化研究者のドナルド・ファンガー教授（『Dostoevsky and Romantic Realism』の著者で東大の沼野充義教授のもと指導教授）、以前札幌に滞在されたタマーラ・フンドロヴァさん（ウクライナ文学）などのご参加も得て、当方としても楽しく有益な時を過ごすことが出来た。ウルフさんの予言どおり、若い学生たちを含め、多くの人が日本の文化や社会そのものに関心を持っているのが感じられた。同日の夕刻に行われたディナーの席での談話会でも、日本の文化や制度に関する話題が関心を呼んで、当方の答え切れないような直接的かつ本質的な質問もたくさん出された。たとえば大学の人文系学問へのファイナンスの問題に対する筆者の回答が、どの程度リアルに聞こえたか、あまり自信がない（何かこういう状況の全体が、オリエンタリズムという観念とも、どこかで関係するようにも思われる）。それよりもうれしかったのは、以前国際ドストエフスキー学会で知り合ったブランデス大学のロビン・ミラー教授がたまたま会に参加してくれたことで、彼女の近著『Dostoevsky's Unfinished Journey』について、最近の関心の対象だという彼女の父親と日本人との交流の歴史について、楽しく語り合うことが出来たのだった。

翌12日は、半谷史郎さんに終日お付き合いいただいて、図書館を中心にハーバードを見学し、さらにボストンの美術館等を回りながら、ロシア史をフィールドとする半谷さんの研究や滞在状況についてのお話をうかがった。研究内容や成果についてはいずれご自身が報告を

半谷史郎氏、ボストン美術館前にて

書かれることだろうから、そちらに譲ることにするが、ハーバードの、とりわけ図書館の研究環境は特筆に価する。アメリカの大学図書館が日本やロシアに比べて、利用者の便宜という点で格段に優れているのは以前から感じていた。この10年ほどの間に、わが国の大学図書館の利用環境（開館時間や検索システム）もかなり改善されたが、しかしアメリカがそれを超えて進化しているというのが、今回の印象だった。一番象徴的なのは、書籍やマイクロ資料の複写利用のあり方で、ハーバードの図書館では複写機がパソコンと一体化しており、通常なら紙に複写印字されるものが、画像データとしてパソコンに取り込まれ、PDFファイルの電子データとしてUSBメモリに保存できるようになっている。（ついでに言うと、紙を利用しないので料金も発生しないという）。パソコンと接続しているのは、本を複写するコピー機だけではない。マイクロ・リーダーもパソコンに接続されていて、マイクロの画像も同様にPDFファイルの電子データとして保存することができる。旧ソ連の文書館で資料を書写していたような状況からすると、まさに別世界で、特にハーバードのようにマイクロ化された各国のアーカイヴ資料を大量に所蔵している場合、当該分野の資料利用において大きなアドバンテージを持っているということになる。後に半谷さんが見本として、ソ連期アーカイヴ資料（マイクロ）のPDF版（ソ連後期の日本におけるトルストイ展の計画をめぐって、在日ソ連大使館とソ連文化省との間に交わされた書簡）を筆者宛に電子メールで送ってくれたが、それを眺めても、効率化を追求するアメリカの大学のまっしぐらな姿勢が、ちょっとした空恐ろしさも含めて、感じられるのだった。

なお図書館はすべて開架式で、数多くの本を手にとって眺めることができるが、書棚に収まりきらない本（割合は不明だが、かなりの数になると思われる）は郊外に巨大な書庫があって、そこに一括収納されている。蔵書の検索画面で書庫収納となっている場合、取り寄せボタンをワン・クリックすれば、翌日には指定の場所に届くシステムになっている。

研究自体とは別の滞在環境に関しては、やはりアメリカの大学都市の住居費の高さが問題と思われた。直接住居を拝見したわけではないが、半谷氏が住む大学に程近い（おそらく）質素なアパートの部屋代が、月額1600ドルもするという。通貨の換算レートにもよるが、これは一般的に見て、滞在費用（月額33万円程度）中、住居費が生活費や研究費を大いに圧迫するという構図である。ITPの研究員としては学生用の寮などの施設を利用できないことから生ずる状況だが、この問題をどのようにクリアーするかがITPとしても検討課題であることは間違いない（後に聞いたところでは、ハーバードのあるケンブリッジという町は、全米でも物価が高いところのようだ）。

いずれにせよ、従来主としてロシアを滞在研究の場としてきた半谷さんは、英語圏の新しい環境に大きな刺激を受けながら、将来の研究を構想しているように観察された。これまで半谷さんとじっくり会話したことがなかった筆者だったが、この期に個人史や研究活動史から趣味の落語鑑賞の話題に至るまでいろいろなお話をうかがって、その人となりに大いに興味を覚えた。

ボストンの町は札幌と違わないほどの低めの気温だったが、13 日に訪れたオックスフォードは好天のせいもあって大変暖かく、桜（に似た木）が花を咲かせ、木蓮がつぼみを膨らませていた。筆者にとっては初めての訪問だったが、種々のカレッジが何十も集まって大学というひとつの町をなしている様子は、きわめて想像力を刺激する光景である。中世の修道院から独立して発達してきたその経緯自体にも、妙に政治的だったり血なまぐさかったりするエピソードがふんだんに含まれていて、総じてアメリカの大学とはまったく違う歴史の現前を感じさせる。

ITP でオックスフォードに滞在しているのは乗松亨平、平松潤奈夫妻。半谷さんが歴史家であるのに対して、こちらは文学が専門である。受け入れ先は同大学のセント・アントニー・カレッジだが、専門の関係でニュー・カレッジのアンドレイ・ゾーリン教授（18 世紀・19 世紀ロシア文化論。「Кормя двуглавого орла...」の著者）およびカトリオナ・ケリー教授（ロシアモダニズム文化・ジェンダー論など。「Children's World: Growing Up in Russia, 1890-1991」の著者）が指導教授となっている。

シンポジウムの様子、中央が乗松亨平氏

乗松さんたちは昨年の夏からの滞在なので、まだ数ヶ月の研修期間を残しているが、会計年度の終わりに際して、同僚と協力して立派なシンポジウムを企画された。今回の筆者の訪問はそれにあわせたもので、3 月 15 日、セント・アントニー・カレッジの気持ちの良い庭に面したホールで、終日研究会につき合わせていただいた。

シンポジウムのテーマは『Cultural Creation of "Russian Reality"』。いわゆる「現実」の像が文化的構築物であることを前提に、東西文化のコンテクストにおける他者認識の問題や、帝政時代と 20 世紀ソ連それぞれの文化イデオロギーの問題を絡めて、ロシア的現実像の動態を論じるという狙いである（詳しい趣旨とプログラムは http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/itp-hp/event/event005.html を参照）。報告者は 7 名で、その中には『Russian literature and Empire』の著者のスーザン・レイトン氏（エディンバラ大学客員研究員：報告テーマは「ロシアのツーリズム、ナショナリズムと社会的アイデンティティ：大改革初期における自己と他者の表象」）や『Искусство как препятствие』などで有名なミハイル・ルイクリン氏（フンボルト大学客員研究員：「『世界で一番』――地下鉄のディスコースとテロルのディスコース」）も含まれている。2006 年度にセンターの冬季シンポジウムに参加したシベリア史やユーラシア主義の研究者マーク・バッシン教授（バーミンガム大学）も、ケリー教授やゾーリン教授と並んで司会者の役を勤められた。大変豪華な顔ぶれによる、和気藹々としたシンポジウムである。平松さんの「スターリン文化におけるミメーシス的表象と暴力：ショーロホフの場合」、乗松さんの「ベストゥージェフ＝マルリンスキーの『アマラート・ベーク』にみる『ロシア・オリエンタリズム』をめぐる議論」という報告も、それぞれの博士論文を発展させた充実した内容で、興味深い議論を呼んでいた（シンポジウムの詳細については、平松さんが報告を書かれる予定なので、そちらを参照されたい）。3 月のイギリスで庭に面した窓を開け放って会議を行うというのは、おそらく大変恵まれた珍しい状況で、続いて行われたワイン・レセプションや夕食会も含めて、

「夢のような」と言いたい経験だった。外国の環境にいながらヨーロッパ各地からゲストを招いて会を催すということは、企画・交渉から事務的な会計処理に至るまで、大変な努力を伴う作業だったと思われる。この快挙を成し遂げた乗松・平松両氏、および協力してコンフェレンスを準備した同僚のカタリナ・ウールさんに、感謝と賞賛の言葉を捧げたい。

翌16日にはゾーリン教授が、ご多忙の中、ご自身の所属するニュー・カレッジでの昼食に招待してくださった。町の中心に近い歴史のある建物で（ニュー・カレッジといっても13世紀からあるそうだ）、何百年の古木を擁する美しい中庭、立派な礼拝堂、狭い階段を上ったところにある修道院のホールのような教職員の食堂など、すべてが大変に印象的だった。各国の文化文芸の研究はこのカレッジが中心で、ロシアから呼ばれたゾーリン教授も、ここでスペインやイタリアなどの専門家たちと肩を並べて、ロシア学の発展につとめているようだ。オックスフォードの各カレッジと大学全体との関係は、一口でいえぬほど複雑なもののようだが、大学の本部が大きな力を持っていることは確かなようで、人事などの問題をめぐっては、カレッジ内の意思決定と大学本部との交渉とに大変な労力が払われるようだ（なぜこのような話になったかというと、ゾーリンさんはこの後すぐに人事がらみの会議があって、ラテン系の同僚を相手に難しい交渉が控えているのだった）。ゾーリンさんは今年千葉大学に滞在研究が決まっているそうなので（受け入れは鳥山祐介氏）、来日の際には札幌での講演なども企画したいと思っている。ゾーリン氏を含めて、今回イギリスで会った何人かの人文系研究者が、日本での研究や日本人との共同研究に関心を示していた。スラブ研究センターの外国人客員プログラムにも、人文系の応募が増えて行くかもしれない。

今回はシンポジウム自体の印象が強く、乗松さんや平松さんの生活についてはあまり詳しくうかがう機会がなかったが、自分のペースを守り、周囲とも良い関係を作りながら、着実な研究生活を送っているように推測された。郊外に住んでいるお二人には自転車が欠かせない通勤手段だとのこと。これから初夏にかけての良い季節に、お二人がさらに実り多い滞在生活を続けてくれることを願うものである。

筆者はこの後ロンドンに3日間滞在して帰国した。おりしもテート美術館でロートチェンコとポポーワのロシア構成主義美術に関するきわめて充実した展覧会が行われていたこともあり、イギリスにおけるロシア文化のプレゼンスを強く感じる旅となった。

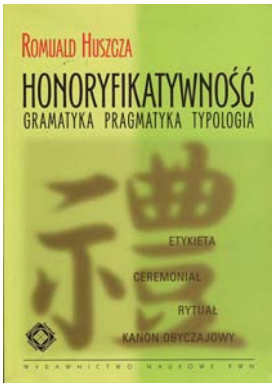
ロムアルド・フシチャ教授をお迎えして

野町素己（センター）

去る3月19日（木）、ワルシャワ大学及びヤゲロー大学で教鞭をとる言語学者ロムアルド・フシチャ教授がセンターを訪問された。フシチャ教授は、ポーランド語を中心としたスラヴ諸語と東アジア諸言語の研究に取り組まれ、中でも現実的文分節（テーマ・レーマ）研究や敬語論は著名である。教授の敬語論は「敬語論：文法・語用・類型」（2006年、ワルシャワ）として出版されているので、関心のある方はぜひご一読されたい。

ロムアルド・フシチャ教授

個別言語研究の伝統に捉われない研究姿勢を貫く教授は、ポーランドの言語学界ではいわば「異端」的な存在であるが、これは決して悪い意味ではない。フシチャ教授は言語学の理論的な知識だけではなく、実際に自由に操れる言語の数



敬語論

は10を超え、その学問への飽くなき探究心は「異端」に正当性を与えている。

今回は私の専任セミナーのコメンテーターとして教授をセンターにお招きしたのであるが、これまでセンターでは言語学関係の催しがほとんど行われてこなかったので、これを機にフシチャ教授に特別講義をお願いした。センターの研究動向と雰囲気を遠まわしに（？）お伝えしたところ、勘の良い教授は「政治と文法：社会記号論によるポーランド語敬語諸相」と題した講義を企画してくださった。講義はポーランド語の人称代名詞の使用法を共時的かつ通時的に論じるもので、伝統的なポーランド語研究における代名詞の扱いを批判的に紹介した上で、数多くの実例を元に、特に政治と言語使用との関連を強調しつつ、代名詞の社会的機能と文法的特徴に関する教授の持論が展開された。

春休み中ということもあってか、聴講者が比較的少数であったのが残念ではあるが、標準ポーランド語のみならず諸方言や数多くの言語の例を用いる教授の論には説得力があり、聴講者との討論も充実したものとなった。フシチャ教授の講義は、言語が政治、歴史、社会といかに密接に関わっているかということを私たちに改めて認識させる、極めて有意義な講義であったように思う。尚、フシチャ教授は大変流暢な日本語で講義をされたことも、ここに申し添えておきたい。

＊　　＊　　＊

さて、私がフシチャ教授に初めてお目にかかったのは学部3年生のときであるから、もう10年も前のことである。当時東京大学の言語学研究室に研究員として滞在していらした教授は、私が所属していたスラヴ語スラヴ文学研究室で、西スラヴ諸語統語論の対照研究に関する連続講義をされた。私は恥ずかしくて人前で質問できなかったので、講義後にこっそりと質問させていただいた。フシチャ教授は、私の的外れな質問にも非常に丁寧に答えて下さったが、様々なスラヴ諸語の、しかも標準語だけではなく方言をも含めた圧倒的な知識を、淀みない日本語で的確に説明されたので、教授の偉大さを感じるというより、むしろその奥深さに絶望的な気分にさえなった。

向かって右より筆者、シャトコフスキ教授、レンビシェフスカ女史

数年後、スラヴ語類型論研究のためにセルビアに留学していたとき、恩師の一人沼野充義教授から大学間協定に基づくワルシャワ大学への長期派遣のお話をいただいた。セルビアに慣れてきた頃であったから当然迷ったが、私の迷いを知ってか、沼野先生は「フシチャさんの指導も受けられますよ」とおっしゃった。まさに殺し文句である。

ワルシャワ大学に赴任したときにフシチャ教授は、私のことを覚えていらっしゃらなかったが、自分の研究テーマを教授に申し上げると、教授は自分の「専門」を狭めないでいろいろな講義に出ることを勧められ、ポーランド学科、西・南スラヴ学研究所、応用言語学科、

形式言語学科など様々な学科に私を連れて行き、多くの先生を紹介してくださった。スラヴ諸語方言研究の重鎮ヤヌシュ・シャトコフスキ教授もその一人であった。

シャトコフスキ教授のスラヴ諸語方言学の講義は、基礎的なことから非常に高度なことまで網羅され、その理路整然とした説明は見事という他はなかった。ただ、各スラヴ語の方言テクストを正確に発音させ、それをその場でポーランド語に訳すのは非常に困難であった。しかし、この講義でカシュブ語（方言）のテクストを輪読したことがきっかけで、私は研究の範囲を広げることとなった。方言テクストに出てきたカシュブ語特有の構文についてフシチャ教授にお話しすると、すぐにポーランド語と比較して論文にまとめるように強く勧められた。教授はその場で幾つもの例文、主要な研究者の名前や参考文献を教えてくださった。その後、フシチャ教授との交流を続けながらカシュブ語に関する幾つかの論文をまとめた。今回の専任セミナーのテーマもその一つである。

専任セミナーでの批評を踏まえ、今回の論文はモスクワ大学で行われた大規模な国際シンポジウム「現代世界におけるスラヴ諸語とその文化」（2009 年 3 月 24 ～ 26 日）にて、幾分変更したものをイギリス・スラヴ東欧研究学会（BASEES）（2009 年 3 月 28 ～ 30 日）の年次集会で報告したが、どちらの学会でも概ね好意的に受け止められた。改めてフシチャ教授および関係者に感謝する次第である。

向かって右より筆者、ストーン教授、ヴェーラ夫人

尚、モスクワではシャトコフスキ教授、そして当時シャトコフスキ教授の講義を一緒に聴講していた東スラヴ諸語方言研究者ドロタ・レンビシェフスカさんとの束の間の再会を喜んだ。

また、オックスフォードではカシュブ語研究について西スラヴ諸語研究の大家ジェラルド・ストーン教授と意見交換し、共同研究の新たな可能性も見えてきた。

小さなカシュブ語が紡ぎだした私の人脈は、北はポーランドのヘル半島から南はマケドニアのスコピエまで、西はイギリスから東は日本までと極めて広い。しかし、その始まりはフシチャ教授との出会いにある。今後の研究生活において、このような出会いはどれぐらいあるのだろうか。それを思うと研究にも精が出るというものである。

学　界　短　信

◆　西日本ロシア東欧研究者集会開催される　◆

第 21 回西日本ロシア東欧研究者集会が、3 月 7 日に神戸大学文学部で開催されました。研究会では、寺山恭輔氏（東北大学）が「1930 年代後半のソ連極東における動員政策」、西村木綿氏（京都大学院生）が「ロシア初期社会主義におけるユダヤ人労働者総同盟『ブンド』の意義とその特異性」、冨岡庄一氏（広島大学）が「ロシア企業家史考」というタイトルで報告をおこない、それぞれについて活発な討論がおこなわれました。

翌日の合同「フィールド調査」では、第一次世界大戦期にオーストリア兵の捕虜収容所があった青野ヶ原と、日露戦争期と第一次世界大戦期にロシア兵ないしオーストリア兵の捕虜収容所が所在した姫路を訪れ、収容所跡の見学をおこなった。次回は広島で開催される予定です。［林］

◆　学会カレンダー　◆

2009 年 5 月 29-31 日　アジア世界史学会第 1 回国際会議　於大阪大学
6 月 6-7 日　比較経済体制学会全国大会　於国学院大学
6 月 27-28 日　日本比較政治学会大会　於京都大学
7 月 9-10 日　新学術領域研究国際シンポジウム・スラブ研究センター夏期国際シンポジウム
10 月 8-11 日　中央ユーラシア学会（CESS）年次大会　於トロント
10 月 11-12 日　ロシア史研究会大会　於法政大学
10 月 17-18 日　ロシア・東欧学会　於秋田大学
10 月 24 日　比較経済体制学会秋期大会　於立命館大学（琵琶湖・草津キャンパス）
10 月 24-25 日　日本ロシア文学会定例総会　於筑波大学
11 月 6-8 日　日本国際政治学会研究大会　於神戸
11 月 12-15 日　米国スラブ研究促進学会（AAASS）年次大会　於ボストン
2010 年 7 月 26-31 日　ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）第 8 回世界会議　於ストックホルム

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。［大須賀］

大学院だより

北海道大学大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、2008 年度、封安全さんが博士号を取得しました。上海の名門、華東師範大学に就職し、ますますの活躍が期待されます。また、左近幸村さんは単位修得退学し、日本学術振興会海外特別研究員としてサンクト・ペテルブルグに留学します。

4 月には、修士課程 6 名、博士課程 2 名（うち内部進学 1 名）の新入生を迎えました。今年度の大学院生およびスラブ研究センター研究生は以下の皆さんです（研究テーマは仮のものを含みます）。［宇山］

学年	氏名	研究テーマ	指導教員（正／副）	
D3	倉田有佳	在日亡命ロシア人	岩下	荒井
	山本健三	ロシア政治思想史におけるポーランド問題およびオストゼイ問題	松里	望月
	秋山　徹	帝政ロシア植民地時代の中央アジアに関する研究	宇山	長縄
	須田　将	ポスト／ソ連中央アジアとくにウズベキスタンの権力と「公民形成」	宇山	岩下
	加藤美保子	ロシアの安全保障とアジア太平洋の地域主義	岩下	林
	立花　優	アゼルバイジャン現代政治	宇山	松里
	井上岳彦	帝政ロシアとカルムィク人	宇山	長縄
	小野田悦子	ロシアにおけるイエズス会の歴史	望月	松里
	麻田雅文	中東鉄道による満洲経営：1896-1935 年	ウルフ	岩下
	高橋沙奈美	ロシア正教をめぐる記憶から見る、ポスト・ソヴィエト社会の国民統合問題	望月	松里
	櫻間　瑛	ロシア連邦沿ヴォルガ地域における宗教 = 民族関係	宇山	松里

	劉　　旭	北東アジアにおけるエネルギー協力	荒井	田畑
	マルティン・ホシェク	極東におけるチェコスロヴァキア軍団（1918-1920 年）	林	ウルフ
D2	竹村寧乃	ソ連初期ザカフカス連邦	宇山	長縄
	イヴォナ・マレロヴァ	日露文学の関係論（ペレーヴィンと村上春樹）	望月	ウルフ
D1	秋月準也	ソ連社会における「日常」の芸術性：ブルガーコフの文学を中心に	望月	野町
	アレクサンドラ・クリャクヴィナ	有島武郎の「或る女」とトルストイの「アンナ・カレーニナ」における女の運命	望月	野町
M2	吉田真由美	ロシアの学校における文学教育	望月	荒井
	牟田恭平	ハンガリー・スロヴァキア西部国境沿い地域における労働力移動	家田	林
	高橋慎明	ドストエフスキー『地下室の手記』批評史の研究	望月	ウルフ
	石黒太祐	チェコスロヴァキア連邦解体過程に関する研究	林	家田
	斎藤祥平	1920-1930 年代におけるユーラシア主義者のソ連観	ウルフ	望月
	関根禎典	ロシア貨幣学およびその関連的研究	ウルフ	望月
	平間惇也	ユーラシア主義	ウルフ	望月
	松下隆志	ウラジーミル・ソローキンと現代ロシア文学	望月	荒井
	エンリク・マリク	日本の対中央アジア外交：カザフスタンを中心に	宇山	岩下
M1	アレクサンドル・クラムスコイ	サハリン大陸棚における石油・天然ガス開発とサハリン州内の反応	荒井	田畑
	マリヤ・アルチュシキナ	東シベリア・極東地域と北東アジア諸国のエネルギー協力におけるサハ共和国の役割	田畑	荒井
	ハン・ボリ（韓寶离）	中央アジア少数民族の生と死に関する人生儀礼：高麗人を中心に	宇山	長縄
	塚田　愛	ウズベキスタンからロシアへの出稼ぎ労働者問題	宇山	山村
	宮風耕治	現代ロシア SF	望月	野町
	長友謙治	世界の農産物市場におけるロシアの役割	山村	田畑
研究生	アセル・ビタバロヴァ	中央アジア地域安全保障	岩下	

図書室だより

◆　耐震改修工事完成による移転について　◆

スラブ研究センターの耐震改修工事は、ほぼ予定通り本年 2 月末に竣工し、大学に引き渡されました。これを承けて、図書室は 4 月 14 日（火）から一時閉室し、移転作業をおこないます。なお、改修後のスラブ研究センター棟では、昨年までと同じく 1 階を使用しますが、大部分の壁を取り払い、一体的にスペースを使えるように、レイアウトを抜本的に見直しました。

移転作業後の、サービス再開は、5 月 20 日ごろを見込んでいます。利用者のみなさまには、しばらくご不便をかけますが、よろしくお願いいたします。［兎内］

ウェブサイト情報

2009 年 1 ～ 3 月までの 3 ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png 等の画像形式ファイルを除く）の統計です。［山下］

	全アクセス数（1 日平均）	うち、邦語表紙アクセス数（1 日平均）	うち、英語表紙アクセス数（1 日平均）	国内からのアクセス数（%）	国外からのアクセス数（%）	不明（%）
1 月	414,667 (13,376)	12,920 (417)	2,250 (73)	138,350 (33%)	200,729 (48%)	75,588 (18%)
2 月	359,826 (12,851)	11,652 (416)	2,275 (81)	108,070 (30%)	186,234 (52%)	65,522 (18%)
3 月	371,594 (11,987)	12,406 (400)	2,182 (70)	92,229 (25%)	207,656 (56%)	71,709 (19%)

編集室だより

◆　スラブ・ユーラシア叢書第 5 巻　◆
『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』の刊行

スラブ・ユーラシア叢書第 5 巻『多様性と可能性のコーカサス：民族紛争を超えて』（前田弘毅編著）が 3 月に刊行されました。2006 年 5 月にスラブ研究センターで開催された同名の公開講座がもとになっています。

本書は、コーカサス史のとらえ方を論じた編者による序章、沿カスピ海空間、北コーカサスとイスラーム、芸術とアイデンティティ等について各 2 章づつ、計 7 本の論文からなります。それぞれ難しいテーマを扱いながらも、地域に関心を持つ一般読者の幅広い興味にこたえることができるよう、平易な語り口につとめました。

昨年夏のグルジア紛争で再び注目を集めたコーカサスですが、今も戦争、テロ、資源問題といった地域の実情を無視した観点からのみ語られがちです。知的な刺激を大いに与える独特の空間としてのコーカサスという磁場の持つ不思議な魅力が読者に少しでも伝われば幸いと考えます。［前田］

序章　前田弘毅　コーカサス史の読み方：歴史における「辺境」と「中心」

第 1 部　カスピ海研究の可能性：ユーラシア地域ネットワークと世界秩序の関連を知るために

第 1 章　宇山智彦　中央アジアとコーカサス：近くて遠い隣人？

第 2 章　廣瀬陽子　コーカサスをめぐる国際政治：求められるバランス外交

第 2 部　コーカサスはイスラーム・テロリズムの温床か？：ロシア・イスラームを知るために

第 3 章　北川誠一　チェチェン紛争の現在：野戦軍司令官からジャマーアト・アミールへ

第 4 章　松里公孝　ダゲスタンのイスラーム：スーフィー教団間の多元主義的競争

第 3 部　美的表象とコーカサス社会

第 5 章　中村唯史　特権的トポスのはじまり：コーカサス表象の原型と「他者の声」について

第 6 章　松本奈穂子 舞踏とアイデンティティの多面性・流動性：コーカサス系トルコ国民を中心に

◆　スラブ・ユーラシア叢書第 6 巻　◆
『日本の中央アジア外交：試される地域戦略』の刊行

スラブユーラシア叢書 6『日本の中央アジア外交：試される地域戦略』（宇山智彦、クリストファー・レン、廣瀬徹也編著）が北海道大学出版会から刊行されました。2007 年 9 月に東京大学で開いた国際ワークショップ「日本のシルクロード外交」（センターニュース 111 号参照）での報告の増補改訂版を集めたものです。日本の研究者と元外交官、ワークショップの共催者であった中央アジア・コーカサス研究所／シルクロード研究プログラム（CACI & SRSP）の研究者など、多彩な執筆陣が、日本の中央アジア外交の歴史と現状を分析し、提言をおこなっています。国際秩序が流動化し日本の外交力が問われている今、多くの皆様にご一読いただければ幸いです。

なお、先行して英語版が、Japan's Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead というタイトルで CACI & SRSP から刊行されており、ウェブで閲覧することができます <http://www.isdp.eu/files/publications/books/08/cl08japansilk.pdf>。日本語版では、英語版作成後に生じた修正や、結語、年表などを加えてあります。

序

第 1 部　中央アジア外交の理念
第 1 章　廣瀬徹也　対中央アジア外交の概観：実務レベルでの政策立案者の視点から
第 2 章　河東哲夫　対中央アジア政策の推移：シルクロード外交から「中央アジア＋日本」へ
第 3 章　クリストファー・レン　日本の中央アジアに対する関与をどう理解するか：開発戦略の再評価
第 4 章　湯浅剛　ユーラシアへの「価値の外交」は定着するか：「自由と繁栄の弧」構想とその後

第 2 部　歴史・理論・地政学
第 5 章　宇山智彦　対中央アジア外交の歴史的文脈と展望：アジア主義と日米関係のはざまで
第 6 章　ティムール・ダダバエフ　対中央アジア協力の現状と課題：機能主義の観点から
第 7 章　岩下明裕　上海協力機構：「反米」ゲームの誘惑に抗して

第 3 部　経済協力と支援
第 8 章　エリカ・マラト　クルグズスタンは中央アジアにおける日本の最重要パートナーか？
第 9 章　嶋尾孔仁子 現代グローバル化の下での日本のエネルギー戦略：西アジア・中央アジアの場合
第 10 章　ニクラス・スワンストローム　中央アジア地域の経済協力と紛争管理：北東アジア諸国の役割

◆　Slavic Eurasian Studies No. 20　◆
Регионы Украины: Хроника и руководители 3
Крым и Николаевская область の刊行

ながらく中断していた『ウクライナのリージョン』第 3 巻（露語）が、Slavic Eurasian Studies シリーズの第 20 巻として出版されました。この巻では、ミコライフ（ニコラエフ）在住の政治学者オレーナ・ヤツンシカさんが同州の政治史とエリートについて、シンフェロポリ在住の歴史家ドミトリー・リャブシュキンさんが同じくクリミアの政治史とエリートについて書いています。まだ残部はありますので、希望者は kim@slav.hokudai.ac.jp までご一報ください。［松里］

◆ スラヴ研究 ◆

『スラヴ研究』第 56 号は、間もなく刊行される予定です。内容についてはニュース前号をご参照ください。

次の第 57 号（2010 年春刊行予定）では、編集長が長縄に交代します。また都合により、この号に限り原稿締切は通常より 1 ヵ月遅く、9 月末となります。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。［宇山・長縄］

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

第 27 号には 18 本の論文および 1 本の書評が投稿されました。現在レフェリーによる審査が進行中です。今号は野町が編集責任を担当します。［野町］

誰が 何を どこで

2008 年（1 ～ 12 月）の専任／非常勤研究員・客員教授の研究成果、研究余滴のアンケート調査（提出は任意）を以下のようにまとめました。なお分類方法は北大の大学情報データベースにならっています。〔五十音順〕［大須賀］

青島陽子　¶ 1 学術論文　▼ Professionals or Bureaucrats?: Pedagogues and the State during Russia's Great Reforms, *ACTA SLAVICA IAPONICA*, 25:89-111

荒井信雄　¶ 1 学術論文　▼ On the Concept of the Project "Possibility of the Sustainable Development of the Pan-Okhotsk Region" (in Russian) (TABATA Shinichiro, ed., *21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 19, Energy and Environment in Slavic Eurasia: Toward the Establishment of the Network of Environmental Studies in the Pan-Okhotsk Region*, 203-206, SRC)

家田　修　¶ 1 学術論文　▼中域圏：地球化時代の新しい地域研究（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』27-63, 講談社）　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼序文　スラブ・ユーラシア学とは何か（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』11-23, 講談社）　▼スラブ・ユーラシア学の構築『アジア経済』49(9):45-54　¶ 3 著書　▼（編著）『講座スラブ・ユーラシア学 1　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』278（講談社）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ Trans-national Nation Building in Post-communist Eastern Europe: Minority Protection, Anti State Sovereignty, New European Citizenship, or Something Else, Oxford Roundtable "History and International Politics: Nations and Empires," Pembroke College, Oxford (2008.8.12)

石井　明　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼対ロ関係（中国総覧編集委員会編『中国総覧 2007 ～ 2008 年版』201-212, ぎょうせい）　▼中国から見たロシア外交戦略『ユーラシア研究』［ユーラシア研究所編］39:20-25　（5）その他　▼第 5 回優秀論文賞選考理由『アジア政経学会ニューズレター』29:2　▼ 2007 年研究大会部会報告 - 部会 6「戦後日本外交における『二つの中国』と『政経分離』」『JAIR Newsletter』［日本国際政治学会］115:7-8　¶ 5 学会報告・学術講演　▼共通論題報告「現代化建設と中国外交」, 日本現代中国学会第 58 回全国学術大会（2008.10.18）

伊藤庄一　¶ 1 学術論文　▼ Russia's Energy Diplomacy toward the Asia-Pacific: Is Moscow's Ambition Dashed? (TABATA Shinichiro, ed., *21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 19, Energy and Environment in Slavic Eurasia: Toward the Establishment of the Network of Environmental Studies in the Pan-Okhotsk Region*, 33-65, SRC)　▼ China's Surging Energy Demand: Trigger for Conflict or Cooperation with Japan?, *East Asia: An International Quarterly*, 25(1):79-98　▼東アジア貿易のフロンティア：中国東北経済圏、極東ロシア（大木博己編著『東アジア国際分業の拡大と日本』85-104, ジェトロ）　¶ 2 その他

業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼日本の政策形成におけるエネルギー戦略の座標軸『GPI (Guiding Policy Innovation) Brief』5:7-9　▼国策と国際貢献：同時追求のチャンス『エネルギーフォーラム』33（2008.4）　▼ロシアにおける中国のエネルギー権益確保行動と、我が国の対応：原油パイプライン・プロジェクト問題を中心に（『ロシア問題研究会』17-33, 財団法人国際金融情報センター）　▼資源争奪戦の落とし穴『朝日新聞』（2008.9.22）　▼ Watch Out for the Pitfalls of the "Resources Capturing War"（朝日新聞 HP）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ Constructing Energy Security in the Asia-Pacific: Can China, Japan, and the United States Overcome Geopolitical Constraints?, 49th International Studies Association Annual Convention, San Francisco (2008.3.27)　▼ Potential Areas for Japan–U.S. Energy Strategy Adjustment toward Russia, The Nixon Center, Washington D.C. (2008.12.3)　▼ Russia's Energy Diplomacy toward the Asia-Pacific Region, Center for Strategic & International Studies (CSIS), Washington D.C. (2008.2.26)　▼ New Areas for Enhancing the U.S.-Japan Partnership: Toward Energy and Environmental Security in the Asia-Pacific, Workshop on "An Enhanced Agenda for U.S.-Japan Partnership," New York (2008.2.25)　▼ Energy Cooperation in Northeast Asia and Japan's Strategy, 1st Joint Symposium between Institute for Russian, East European and Eurasian Studies, Seoul National University & Slavic Research Center, Seoul (2008.2.21-22)　▼ Competition and Cooperation in Northeast Asian Energy Security: Japan's Potential and Expected Roles Revisited, International Conference on East Asian Cooperation, Seoul (2008.1.7-8)

岩下明裕　¶ 1 学術論文　▼上海合作組織與日本：一起行動重新機建構欧亜共同体『俄羅斯中亜東欧研究』第 3 期 :92-94　▼ Mas alla de la ignorancia la ignorancia la orientacion respecto a China y Rusia, *Vanguardia Dossier*, 29:80-83　▼ The Shanghai Cooperation Organization: Beyond a Miscalculation on Power Games (Christopher Len, Uyama Tomohiko, and Hirose Tetsuya, eds., *Japan's Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead,* 69-85, Washington, D.C. and Stockholm: Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies Program)　▼ China and Central Asia: A Research Report on the Border Contiguity (Hiroshi Okuda, Jarmo Kortelainen, eds., *Russian Border Regions from the Perspective of Two Neighbours*, 113-124, Center for Development Policy Studies, Hokkai-Gakuen University)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼「四島返還」だけでは揺さぶれない『VOICE』210-213（2008.3）　▼ユーラシアとアジアの様々な三角形：国境政治学試論（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』197-220, 講談社）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ The Shanghai Cooperation Organization and the West: Confrontation or Cooperation in Eurasia?, Kennan Institute, Washington, DC (2008.2.4)　▼ The Japan-US Collaboration with Russia: China, Eurasia and the Northern Territories, Center for Strategic and International Studies, Washington, DC (2008.4.10)　▼ New Geopolitics in Eurasia, Association for Borderland Studies 50th Annual Coference, Denver (2008.4)　▼ The New Geopolitics and Rediscovery of the US-Japan Alliance: Reshaping Northeast Asia, The Brookings Institution, Washington, DC (2008.6.10)

宇山智彦　¶ 1 学術論文　▼序章　地域認識の方法：オリエンタリズム論を超えて（宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学 2　地域認識論：多民族空間の構造と表象』11-36, 講談社）　▼ Japan's Diplomacy towards Central Asia in the Context of Japan's Asian Diplomacy and Japan-U.S. Relations (Christopher Len, Uyama Tomohiko, and Hirose Tetsuya, eds., *Japan's Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead,* 101–120, Washington, D.C. and Stockholm: Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies Program)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼アブハジア・南オセチア：小さな地域の大きな紛争『世界』54–61（2008.11）（2）研究ノート等　▼研究案内：中央アジア・ロシアのイスラーム（小杉泰、林佳世子、東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』398–402, 名古屋大学出版会）　▼ Historiography of Local and Regional Studies in Western Kazakhstan: An Alternative to National History?, *Central Eurasian Studies Review*, 7(2):16–22　▼カザフの民族主義（20 世紀初頭）（歴史学研究会編『世界史史料 第 9 巻 帝国主義と各地の抵抗 II 東アジア・内陸アジア・東南アジア・オセアニア』248–249, 岩波書店）（4）翻訳　▼グルミラ・スルタンガリエヴァ「南ウラルと西カザフスタンのテュルク系諸民族に対するロシア帝国の政策の同時性（18-19 世紀前半）」『ロシア史研究』82:61–77　（5）その他　▼南オセチア紛争：非承認国家問題の正しい理解を『軍縮問題資料』41–48（2008.10）　¶ 3 著書　▼（編著）『講座スラブ・ユーラシア学 2　地域認識論：多民族空間の構造と表象』322（講談社）　▼（Christopher Len, Hirose Tetsuya と共編著）*Japan's Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead*, 206 (Washington, D.C. and Stockholm: Central Asia-Caucasus Institute & Silk Road Studies Program)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼帝国の弱さ：ユーラシア近現代史から見る国家論と世界秩序 , 21 世紀 COE 総括シンポジウム「スラブ･ユーラシア学の幕明け」, 東京（2008.1.24）　▼小国の強さ：「帝国」的世界

秩序の中の中央アジア , 中央ユーラシア調査会シンポジウム「中央アジアと東アジア協力の展望」, 東京（2008.2.4） ▼ Взгляды казахской интеллигенции на суд биев, русский суд и шариат (конец XIX—начало XX вв.), Международная научная конференция «Казахский суд биев — уникальная судебная система», Алматы (2008.5.22) ▼グルジア紛争の三層構造：ローカル、リージョナル、グローバル , スラブ研究センター・笹川平和財団共催シンポジウム「ロシアと米国の新冷戦？ ユーラシアの今を読む」, 東京（2008.9.11） ▼ Historiography of Local and Regional Studies in Western Kazakhstan: An Alternative to National History?, Central Eurasian Studies Society, Ninth Annual Conference, Washington, D.C. (2008.9.20) ▼日本国際政治学会 2008 年度研究大会 , 筑波（2008.10.25-26）ロシア・東欧分科会Ⅱおよび部会 14「バルカン地域と EU 拡大」におけるコメンテータ

ウルフ、ディビッド ¶ 1 学術論文 ▼ Riding Rough: Portsmouth, Regionalism and the Birth of Anti-Americanism in Northeast Asia (*The Treaty of Portsmouth and Its Legacies*, 125-141, Hanover, NH: Dartmouth College Press) ▼ (with Sergey Radchenko) To the Summit via Proxy-Summits: New Evidence from Soviet and Chinese Archives on Mao's Long March to Moscow, 1949, *Cold War International History Bulletin*, 16:105-182 ▼ Cultural and Social History on Total War's Global Battlefield, *Russian Review*, 67:70-77 ¶ 2 その他業績（論文形式） (3) 書評 ▼ Michael Share, *Where Empires Collide, The International Journal of Asian Studies*, 5(2):253-255 ▼ Tsuyoshi Hasegawa, *The End of the Pacific War*, *Slavic Review*, 67(4):1032-1033 ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ Stalin's Northeast Asia and the Lost Peace of 1951, 2008 Summer International Symposium "Northeast Asia in the Cold War: New Evidence and Perspectives," SRC, Sapporo (2008.6.26-27) ▼ The Cold War in Northeast Asia: Past and Present, Seoul National University (2008.2) ▼Russia's Great War, Siberia and the Far East, Aberdeen, Scotland (2008.7) ▼スターリンの描いたスラブ・ユーラシア , 21 世紀 COE 総括シンポジウム「スラブ･ユーラシア学の幕明け」, 東京（2008.1.24）

木山克彦 ¶ 1 学術論文 ▼ロシア沿海州における金・東夏代の城郭遺跡（特集・北東アジアの中世考古学）『アジア遊学』［勉誠出版］107:24-34 ¶ 2 その他業績（論文形式） (2) 研究ノート等 ▼「シャイガ城址」「ノヴォパクロフカ 2 城址」「ニコラエフカ城址」（特集・北東アジアの中世考古学）『アジア遊学』107:150-152, 154-157, 158-159 (4) 翻訳 ▼ヴァシレフスキー A.A.、グリシェンコ V.A.、フェドルチュク V.D.、モジャエフ A.V.「2003 ～ 2007 年におけるサハリン国立大学による考古学調査」（『2008 年度北海道考古学会遺跡報告会資料集』71-83, 北海道考古学会） (5) その他 ▼（臼杵勲、布施和洋と）ロシア沿海地方金・東夏代城郭集成（臼杵勲・木山克彦共編『北東アジア中世遺跡の考古学的研究 研究成果報告書』60-102 頁 , 札幌学院大学） ▼遼代におけるモンゴル高原統治の実態解明に向けた考古学的研究：辺防三州の城郭調査と遼代の城郭構造と分布の解析（『三島海雲財団研究報告書平成 19 年度〈第 45 号〉』88-91, 財団法人三島海雲記念財団） ▼（博士論文）『北東アジアにおける先史から中世期の地域間交渉に関する考古学的研究』327（北海道大学） ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼北東アジア陶質土器の展開 , シンポジウム「中世総合資料学の実践：間宮海峡から琉球弧へ」, 中世総合資料学研究会 , 東洋大学（2008.1） ▼中国山西省遼金時代建造物管見 , 第 9 回北アジア調査研究報告会 , 北海道大学（2008.3） ▼ The Okhotsk Culture; Maritime Culture in Hokkaido (c.3-12AD), Hunter – Gatherer Archaeology of the Northern Pacific Rim, Baikal Archaeology Project 2008 Work Shop, University of Alberta, Edmonton (2008.10)

高尾千津子 ¶ 1 学術論文 ▼内なる境界：ロシアユダヤ人の地理空間（松里公孝編『講座スラブ･ユーラシア学 3 ユーラシア：帝国の大陸』207-237, 講談社） ▼ロシア革命とユダヤ・アイデンティティ（市川裕、臼杵陽、大塚和夫、手島勲矢編『ユダヤ人と国民国家：「政教分離」を再考する』215-236, 岩波書店）¶ 2 その他業績（論文形式） (5) その他 ▼ハルビンのユダヤ人社会『異郷』［来日ロシア人研究会］26:10-12

田畑伸一郎 ¶ 1 学術論文 ▼地球化と地域経済統合：CIS を中心として（講座スラブ・ユーラシア学 1 開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』221-243, 講談社） ▼ロシアの市場経済化とエネルギー貿易（池本修一、岩﨑一郎、杉浦史和編著『グローバリゼーションと体制移行の経済学』202-220, 文眞堂） ▼経済の石油・ガスへの依存（田畑伸一郎編著『石油・ガスとロシア経済』77-100, 北海道大学出版会） ▼プーチン政権下のロシア経済成長：油価高騰に基づく成長メカニズムとその行方『ロシア NIS 調査月報』13-29 (2008.5) ¶ 2 その他業績（論文形式） (1) 総説・解説・評論等 ▼ロシアの財政状況：安定化基金とその再編をめぐって（『ロシア問題研究会』［財務省委嘱］35-50［http://www.mof.go.jp/jouhou/kokkin/frame.html］, 国際金融情報センター） ▼ロシアの 2020 年までのマクロ経済予測（『2020 年のロシア』［平成 19 年度外務省委嘱調査］42-68, 平和・安全保障研究所） (5) その他 ▼「新冷戦」・

世界株安下のロシア経済（経済教室）『日本経済新聞』29（2008.10.3） ¶ 3 著書 ▼（編著）『石油・ガスとロシア経済』［スラブ・ユーラシア叢書 3］290（北海道大学出版会） ▼（編著）*21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 19, Energy and Environment in Slavic Eurasia: Toward the Establishment of the Network of Environmental Studies in the Pan-Okhotsk Region*, 207 (SRC) ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼ Influence of the Oil Price Increase on the Russian Economy: A Comparison with Saudi Arabia, 10th Bi-annual Conference of the European Association for Comparative Economic Studies, Higher School of Economics, Moscow (2008.8.29) ▼ Russia's Economic Growth: Its Mechanism in 2000-2007 and Its Forecast until 2020, 40th Convention of the AAASS, Philadelphia (2008.11.20) ▼ 2020 年のロシア経済 , 一橋大学経済研究所特別コンファレンス「ロシアの経済発展と中長期的展望」, 一橋大学（2008.3.15）

兎内勇津流 ¶ 1 学術論文 ▼アレクサンドル 1 世期のロシア正教教育改革とプラトン『プラトンとロシア Ⅲ』［21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 25］1-16, スラブ研究センター） ¶ 2 その他業績（論文形式） (1) 総説・解説・評論等 ▼北海道大学スラブ研究センター日露戦争捕虜収容所絵葉書帖（特集・戦争とメディア、そして生活 第二部 図画像コレクションの紹介）『アジア遊学』［勉誠出版］111:166-168 ▼О букваре, изданном в Хакодате И. Маховым в 1861 году (*Региональное книговедение: Сибирь и Дальний Восток*, Новосибирск, 550–557, ГПНТБ СО РАН) ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼島田元太郎文書について , 函館日ロ交流史研究会 , 函館（2008.4.20） ▼北海道大学の所蔵する日露関係史料 , 科研費基盤研究 (A)「17-20 世紀の東アジアにおける「外国人」の法的地位」（代表：貴志俊彦 , 神奈川大学）による研究会「東アジア近代史における日本とロシア」, ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所 , ウラジオストク（2008.7.29）

長縄宣博 ¶ 1 学術論文 ▼ロシア帝国のムスリムにとっての制度・地域・越境：タタール人の場合（宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学 2 地域認識論：多民族空間の構造と表象』258-279, 講談社） ¶ 2 その他業績（論文形式） (3) 書評 ▼塩川伸明著『ロシアの連邦制と民族問題：多民族国家ソ連の興亡 III』（岩波書店、2007 年）『ロシア史研究』83:75-78 (5) その他 ▼コメント（『さまざまなイスラーム：アジア・アフリカ研究の現場から』42-44, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所） ▼中央アジア研究動向：北海道大学スラブ研究センター 2007 年度冬期シンポジウム：アジア・ロシア：地域的・国際的文脈の中の帝国権力『日本中央アジア学会報』4:64-67 ▼ Мусульманское сообщество в условиях мобилизации: участие Волго-Уральских мусульман в войнах последнего десятилетия Российской империи (*Волго-Уральский регион как перекресток Евразии: империя, ислам и национальность*, Kazan, September 19, 2008: International Workshop organized by Islamic Area Studies Center at the University of Tokyo and Slavic Research Center http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/eng/20080919/20080919-e.html) また、長縄による英語の会議レポートは、http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20081010e_naganawa.html) ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼五行の実践からみる帝政ロシアのムスリム社会：ヴォルガ中流域・南ウラルを中心に , 21 世紀 COE 総括シンポジウム「スラブ・ユーアシア学の幕開け」, 東京（2008.1.25） ▼ Voyage and Politics: Muslim Travelers from the Volga-Ural Region to the Ottoman Empire at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries, The 40th Annual Convention of the AAASS, Philadelphia (2008.11.21) ▼ Challenge and Leverage: Muslim Travelers from the Volga-Ural Region to the Ottoman Empire at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries, The 42nd Annual Meeting of the Middle East Studies Association, Washington D.C. (2008.11.25)

野町素己 ¶ 1 学術論文 ▼ On the Periphrastic Perfect in Kashubian Literary Language『西スラヴ学論集』11:4-23 ▼ On the Recipient Passive in Kashubian Language (Annex to Milka Ivić's Syntactic Inventory for Slavonic Dialectology), *Јужнословенски филолог* [Српска Академија наука и уметности], LXIV:273-281 ¶ 2 その他業績（論文形式） (3) 書評 ▼ Jože Sever, Aleksandra Derganc, *Ruska slovnica po naše*, *Русский язык за рубежом*, 210(5):98-101 (5) その他 ▼（講習会抄録）言語からみる旧ユーゴ諸国の現代『民族紛争の背景に関する地政学的研究』1:349-364 ▼（新聞インタビュー記事）Japoński profesor szlifuje język kaszubski, *Dziennik Bałtycki* (2008.11.25) ▼（新聞インタビュー記事）Kaszubski z Japonii, *Express Powiatu Wejherowskiego* (2008.11.26) ▼（新聞インタビュー記事）Japończyk zafascynowany kaszubszczyzną, *Dziennik Bałtycki* (2008.11.30) ▼（エッセイ）スラブと私を結ぶ運命の 1 冊『スラブ研究センターニュース』114:17-20

林忠行 ¶ 1 学術論文 ▼戦略としての地域：世界戦争と東欧認識をめぐって（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1 開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』91-118, 講談社） ¶ 5 学会報告・学術講演 ▼比較政治学から：東中欧諸国における政党システムの比較から見えてくるもの , 共通論題 1「体制比較の多様なアプローチ」, 比較経済体制学会 , 高崎経済大学（2008.5.31）

廣瀬陽子　¶２その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼南コーカサス三国とロシア（田畑伸一郎編『石油・ガスとロシア経済』219-250, 北海道大学出版会）　▼ CIS 諸国の新動向：大統領交代と国際情勢の影響に着目して『ロシア NIS 調査月報』1-13（2008.6）　▼ Azerbaijan – a Regional Hub, *Visions of Azerbaijan*, 3(2):4-9　▼ロシア・グルジア紛争で緊迫するコーカサス情勢『ロシア NIS 経済速報』1439:1-11　▼「凍結された紛争」はなぜ熱戦化したのか：グルジア紛争の本質を探る『時事トップ・コンフィデンシャル』2-7（2008.10.3）　▼第４章　アゼルバイジャンにおけるジェノサイドの負の連鎖（黒木英充編『「対テロ戦争」の時代の平和構築：過去からの視点、未来への展望』63-81, 東進堂）（2）研究ノート等　▼執筆ノート『強権と不安の超大国・ロシア：旧ソ連諸国から見た「光と影」』『三田評論』［慶應義塾］1112:80　▼本から時代を読む（大国ロシアと諸地域：地政学から見る国際政治）『論座』332-335（2008.8）　▼映画解説（『チェチェンへ：アレクサンドラの旅』［パンフレット］18-19, パンドラ＋太秦）（5）その他　▼（雑誌のインタビュー記事）グルジアは世界の火薬庫になるか『週刊・東洋経済』136-137（2008.8.9）　▼最近のグルジア情勢によせて（スラブ・ユーラシアの今を読む・第１回）（スラブ研究センター HP：http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20080812hirose.html）　▼（新聞のインタビュー記事）南オセチア、戦闘激化　グルジア「戦時」宣言（クローズアップ 2008）『毎日新聞』（2008.8.10）　▼（新聞のインタビュー記事）専門家の見方：カフカス地域でロシアが影響力『日本経済新聞』（2008.8.12）　▼（雑誌のインタビュー記事）グルジアに絡み合う大国の思惑！『読売ウィークリー』25（2008.8.31）　▼（雑誌のインタビュー記事）グルジア紛争で冬季五輪が開催危機？『週刊朝日』124-125（2008.8.29）　▼（雑誌のインタビュー記事）グルジア戦争は、米ロのウクライナ争奪をめぐる前哨戦『東洋経済オンライン』（2008.8.21）http://www.toyokeizai.net/business/international/detail/AC/f9bb98164ee76d94ffbfc51b977e0b3b/page/2/　▼（新聞のインタビュー記事）直球曲球『日刊工業新聞』1（2008.8.25）　▼（新聞の座談会）南オセチア衝突：グルジア情勢座談会　露と欧米、深まる溝『毎日新聞』6（2008.9.1）　▼（新聞の論評）私の視点（グルジア紛争　「台湾化」の危機、日本は防げ）『朝日新聞』10（2008.9.1）　▼（新聞のインタビュー記事）「新冷戦」なのか：グルジア侵攻は見せしめ『読売新聞』7（2008.9.6）　▼（雑誌のインタビュー記事）著者 Interview　廣瀬陽子『コーカサス　国際関係の十字路』『エコノミスト』54（2008.9.16）　▼（雑誌対談）特別対談　佐藤優×廣瀬陽子　現地メディアで読み解くロシア新帝国主義と「グルジア後」の世界『クーリエ・ジャポン』102-109（2008.11）　▼（雑誌のインタビュー記事）新冷戦序盤戦はロシア優位で進む『週刊・東洋経済』158-159（2008.9.27）　▼（新聞の論評）グルジア後は「新冷戦」か：多極的世界に再来ありえず（卓見異見）『日刊工業新聞』27（2008.10.27）　▼（新聞のインタビュー記事）「文明の十字路」探求に論争恐れず（テークオフ）『朝日新聞夕刊』11（2008.11.22）　▼（新聞の論評）金融危機は世界の多極化促すか：米国凋落、G20 協調の時代（卓見異見）『日刊工業新聞』27（2008.12.1）　¶３著書　▼『強権と不安の超大国・ロシア：旧ソ連諸国から見た「光と影」』278（光文社新書）　▼『コーカサス：国際関係の十字路』220（集英社新書）　５学会報告・学術講演　▼ “Westernization” or Modernization on an Indigenous Basis? : Focusing on the Japanese Case and the Former USSR Countries’ Cases, The International Forum: Expanding the Role of Women in Cross-Cultural Dialogue, アゼルバイジャン・バクー（2008.6.11）　▼ Unrecognized States in the Macro-regional Context of the Black Sea Rims, AAASS 2008 Convention, Session: 10-45 “The Wider Black Sea-Caspian Region: Powers, Players and Stakes,” フィラデルフィア（2008.11.21）

前田弘毅　¶１学術論文　▼歴史の中のコーカサス「中域圏」：革新される自己意識と閉ざされる自己意識（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学１　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』169-193, 講談社）　▼故郷に帰還したゴラーム：サファヴィー朝権力によるグルジア内秩序包摂とその意味『オリエント』51(2): 57-75　¶２その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼「東」と「西」の架け橋：グルジア語の世界（佐藤次高、岡田恵美子編『イスラーム世界のことばと文化』262-279, 成文堂）（3）書評　▼批評と紹介：S. バーバーイー他著『シャーの奴隷たち：サファヴィー朝イランの新エリート』『東洋学報』［東洋文庫］90(3):29-035　（5）その他　▼状況次第で拡大の恐れ（視点）『朝日新聞』12（2008.8.10）　▼コーカサス研究の立場から『スラブ・ ユーラシアの今を読む』第３回 http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20080820maeda.html　▼聖女ニノの泉『キリスト新聞（2008.12.25）　▼挨拶『小笠原で国境問題を考える』［スラブ研究センター・レポート２］http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/report/20081226-j.pdf　¶３著書　▼ *K‘art‘velebi Sep‘iant‘a Iranshi* (Tbilisi: Artanuji)　５学会報告・学術講演　▼ Mamluk Became a Translator and a Translator Became a Mamluk: Mamluk System and Its Legacy in the 19th Century, Symposium “The Caucasus and Its Inhabitants between Russia and Middle East,” The University of Tokyo (2008.1.26)　▼ Identity in Aleksandre Orbeliani: Georgian Nationalism at the Earlier Stage and the Reality, Georgia: The Making of a National Culture, The University of Michigan, Ann Arbor(2008.5.16)　▼ The Importance of Galust Shermazanian’s Work for Iranian and Russian

Relations and the Fate of Enikolopians in the 19th Century, Iran and the Caucasus: Unity and Diversity, Arya University, Yerevan (2008.6.6)

松里公孝　¶ 1 学術論文　▼ Межправославные отношения и трансграничные народности вокруг непризнанных государств. Сравнение Приднестровья и Абхазии (MATSUZATO Kimitaka, ed., *21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 18, Приднестровье в макрорегиональном контексте черноморского побережья*, 192-224, SRC)　▼ From Belligerent to Multi-ethnic Democracy: Domestic Politics in Unrecognized States after the Ceasefires, *Eurasian Review*, 1:95-119.　▼プリアムール総督府の導入とロシア極東の誕生（左近幸村編『近代東北アジアの誕生：跨境史への試み』295-332, 北海道大学出版会）　▼空間の科学：政治研究のツールとしての中域圏概念（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』64-88, 講談社）　▼帝国と心象地理、そして跨境史（松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学 3　ユーラシア：帝国の大陸』11-37, 講談社）　▼境界地域から世界帝国へ：ブリテン、ロシア、清（松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学 3　ユーラシア：帝国の大陸』41-80, 講談社）　¶ 2 その他業績（論文形式）（3）書評　▼崔在東『近代ロシア農村の社会経済史』『歴史学研究』848:71-73　（5）その他　▼台北とテヘランの学会に参加して『スラブ研究センターニュース』116:15-21　¶ 3 著書　▼（編著）『講座スラブ・ユーラシア学 3　ユーラシア：帝国の大陸』334（講談社）　▼（編著）*21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 18, Приднестровье в макрорегиональном контексте черноморского побережья*, 225 (SRC)　¶ 5 学会報告・学術講演　▼新境界地域と人文地政学：地域研究戦略の新展開 , 21 世紀 COE 総括シンポジウム「スラブ･ユーラシア学の幕明け」, 東京（2008.1.24）　▼ Identity Politics in Unrecognized Abkhazia and Transnistria: Inter-orthodoxy Relations and Trans-border Minorities, Conference, “Central Eurasia: Ethnic National Issues,” Central University for Nationalities, Beijing (2008.1.21-22)　▼ The Emerging Border Regions and Russia’s “Near Abroad” Policy, The Second Annual CRCEES Research Forum, University of Nottingham (2008.6.17-18)　▼ Orthodox Churches and Trans-border Politics in the Black Sea Rims, West Coast Seminar at Glasgow University (2008.6.19)　▼ Domestic Politics in Unrecognized States: Nagorno-Karabakh, Transnistria, and Abkhazia, International Conference, “Confrontation in the Caucasus: Roots, Dimensions and Implications,” Institute for Political and International Studies, Tehran (2008.10.28-29)　▼ From Belligerent to Multi-ethnic Democracy: Domestic Politics in Unrecognized States after the Ceasefires, The 40th Annual Convention of the AAASS, Philadelphia (2008.11.20-23)

望月哲男　¶ 1 学術論文　▼（FUKUMA Kayo と）How Many Pictures Does “Roman” Contain?: Vladimir Sorokin and the Russian Landscape (MOCHIZUKI Tetsuo, ed., *21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 17, Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context*, 423-447 SRC)　▼ロシアの空間イメージによせて（松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学 3　ユーラシア：帝国の大陸』139-176, 講談社）　▼現代ロシア文学におけるロシアのイメージ（亀山郁夫編『ソヴィエト全体主義における文化と政治権力の相克および共生に関する超域・横断的研究』7-18, 東京外国語大学）　▼ Shame and Idea: Dostoevsky’s «A Raw Youth» (*Sub Specie Tolerantiae: Памяти В.А. Туниманова*, 243-256, St.-Petersburg: Наука)　¶ 2 その他業績（論文形式）（5）その他　▼アンナの時間、ドリーの時間『en-taxi』［扶桑社］23:153　¶ 3 著書　▼（編著）*21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies No. 17, Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context*, 453 (SRC)　▼（編著）『文化研究と越境：19 世紀ロシアを中心に』［21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 23］182（スラブ研究センター）　▼（翻訳）レフ・トルストイ著『アンナ・カレーニナ　I − IV』602, 514, 600, 434（光文社古典新訳文庫）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼ Literature as Memory: Vladimir Sorokin and the Visual Memory of Russia (in Russian), Conference for the Memory of Dr. Zelenin: The Forms and Methods for the Organization of Memories in the Traditional and Contemporary Cultures, St.-Petersburg (2008.11.6-8)　▼現代文学におけるロシアのイメージ , 21 世紀 COE 総括シンポジウム「スラブ･ユーラシア学の幕明け」, 東京（2008.1.24）　▼『アンナ・カレーニナ』への視点：最近の研究から , ロシア文化研究会合同研修プログラム「文学研究の多様化とその可能性」, 八王子（2008.3.9）

山村理人　¶ 1 学術論文　▼スラブ・ユーラシアにおける農業問題と地球化：旧ソ連諸国の WTO 加盟問題をめぐって（家田修編『講座スラブ・ユーラシア学 1　開かれた地域研究へ：中域圏と地球化』244-269, 講談社）

湯浅　剛　¶ 1 学術論文　▼ Consolidating “Value-Oriented Diplomacy” towards Eurasia? “Arc of Freedom and Prosperity” and Beyond (Christopher Len, Uyama Tomohiko, Hirose Tetsuya, eds., *Japan’s Silk Road Diplomacy: Paving the Road Ahead*, 47-65, Central Asia-Caucasus Institute and Silk Road Studies Program, Johns Hopkins University-SAIS)　¶ 2 その他業績（論文形式）（1）総説・解説・評論等　▼

ロシア・中央ユーラシア：地域の概観、ロシア（広瀬佳一、小笠原高雪、上杉勇司編『ユーラシアの紛争と平和』85-107, 明石書店）　¶ 5 学会報告・学術講演　▼中央アジアの国際秩序：「新たな国際システムの出現」?, 日本国際政治学会 2008 年度研究大会部会 3「ユーラシアの平和構築：秋野豊没後 10 年」つくば国際会議場（2008.10.24）

会　議（2009 年 1 ～ 3 月）

◆　センター運営委員会　◆

2008 年第 3 回　3 月 7 日

議題
1. 共同利用・共同研究拠点申請
2. 運営委員会のあり方
3. 共同研究の辞退
4. 共同利用公募の審査
5. 今後の共同利用・共同研究公募のあり方
6 その他

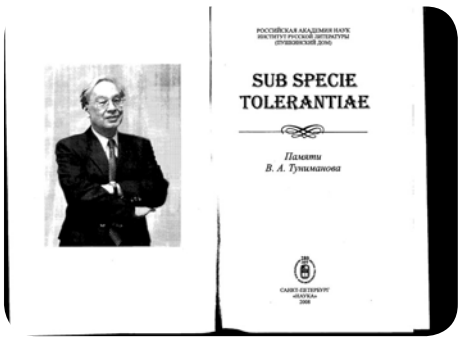
◆　センター協議員会　◆

2008 年度第 7 回　2 月 20 日

議題
1. 北海道大学スラブ研究センター規程及び協議員会規程の改正について
2. 客員研究員公募の審査
3. その他

みせらねあ

◆　トゥニマノフ教授の記念論文集　◆



ロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキン館）の主任研究員で、1994-95 年にスラブ研究センター客員教授をつとめたヴラジーミル・アルチョーモヴィチ・トゥニマーノフ博士は、2006 年 5 月に満 68 歳で亡くなられましたが、博士の思い出にささげられた大部の論文集が、2008 年に出版されました。ドストエフスキー、ゲルツェン、レスコフ、トルストイ、ゴンチャロフなど 19 世紀ロシア文学研究をベースに、批評史やジャーナリズム、比較文学などの領域で幅広い研究成果を残したトゥニマーノフ博士は、ロシア国内ばかりでなく世界各国に研究と交流の足跡を残しており、50 名に及ぶ執筆者の顔ぶれにも、またそのテーマの多様性にも、博士の生

涯の豊穣さが反映されています。書誌情報は以下の通り。［望月］

А.Г. Гродецкая (Ред.) Sub specie tolerantiae. Памяти В.А. Туниманова. Санкт-Перербург: Наука, 2008. Стр. 613.

◆ センターの役割分担 ◆

2009 年度のセンター研究部専任教員の役割分担は、下記の通りです。［松里］

センター長 ..... 岩下

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議 ..... 岩下
教務委員会 ..... 岩下
図書館委員会 ..... 兎内
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会 ..... 山村
21 世紀 COE 推進委、グローバル COE 検討委員会 ..... 家田
全国・学内共同利用研究所などの運営委員会・協議員会 ..... 岩下
オホーツク環境研究ネットワーク ..... 田畑

【学外委員等】

JCREES 日本代表 ..... 松里
JCREES 事務局長 ..... 岩下
地域研究コンソーシアム理事 ..... 家田／岩下
地域研究コンソーシアム運営委員 ..... 家田／野町
京都大学地域研究統合情報センター運営委員 ..... 家田

【センター内部の分担】

改修・疎開 ..... 望月／田畑
大学院教務委員会委員・講座主任 ..... 宇山
入試 ..... 望月／山村
将来構想 ..... 田畑／松里／宇山
総合特別演習（金曜）担当 .... 宇山（前期）／野町（後期）
全学教育科目責任者 ..... 荒井
全学教育科目総合講義 ..... 家田／林／野町
全学教育科目演習 ..... 松里
点検評価 ..... 田畑／荒井
夏期シンポ（2009 年 7 月）..... 田畑
図書 ..... 望月
情報 ..... 望月
予算 ..... 田畑
外国人プログラム長期 ..... 荒井
　アバシン（2009.6.1-10.31）..... 宇山
　ダニレンコ（2009.6.1-8.31）..... 野町
　フィンケ（2009.12.15-2010.3.31）..... 望月
　ジェンティス（2009.9.2-2010.2.28）..... 荒井
　コウォジェイチク（2009.6.1-2009.11.30）松里
　ヴォルコフ（2009.12.1-2010.3.31）..... 田畑
鈴川・中村基金 ..... 長縄（在外研究中は野町）
日本人客員研究員 ..... 山村
公開講座 ..... 野町
専任研究員セミナー ..... 宇山
諸研究会幹事 ..... 山村
雑誌編集委員会 ..... 宇山／長縄／野町／望月／松里
欧文雑誌 ..... 松里（副：野町）
和文雑誌 ..... 長縄
ニューズレター和文 ..... 田畑
ニューズレター欧文 ..... 田畑

◆ 人物往来 ◆

ニュース 116 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。［岩下／大須賀］

1 月 15 日　胡振華（中央民族大、中国）
1 月 22 日　平田武（東北大）

1月30日　Zhulduzbek Abylkhozhin（歴史・民族学研究所、カザフスタン）
1月31日　伊藤融（島根大）、中居良文（学習院大）、吉田修（広島大）
2月　2日　堀江典生（富山大）
2月5-6日　Evgeny Arinin（ヴラジーミル国立大、ロシア）、Bae, Soo Jeong（嶺南大・院、韓国）、Alexander Bukh（筑波大）、Choi, Dokkyu（東北アジア歴史財団、韓国）、Choi, Woo Ik（国民大、韓国）、Choo, Sukhoon（韓国外国語大、韓国）、Chuluunbat, Narantuya（モンゴル国立大）、Timur Dadabaev（筑波大）、Jelisava Dobovšek-Sethna（東京外国語大）、Feng, Shaolei（華東師範大、中国）、Feng, Yujun（中国現代国際関係研究所）、Gao, Shuqin（北京大、中国）、Guan, Guihai（同）、Ha, Yongchool（ソウル大、韓国）、Hahn, Jeung-Sook（同）、Mesut Idriz（MPHグループ出版、マレーシア）、Artem Ivannikov（ヴラゴヴェシチェンスク教育大・院、ロシア）、Jung, Sejin（漢陽大、韓国）、Kang, Meong Soo（忠州大、韓国）、Kang, Yoon Hee（国民大、韓国）、Ki, Kyehyeong（漢陽大、韓国）、Kim, Doug Joong（京畿大、韓国）、Kim, Jin Kyu（高麗大、韓国）、Kim, Kyuchin（韓国外国語大）、Kim, Seongjing（徳成女子大、韓国）、Kim, Taehwan（韓国国際交流財団）、Kim, Wonhoi（韓国外国語大）、Ludovic Klein（松山大）、Boris Lanin（神戸大）、Lee, Jeong Hi（嶺南大、韓国）、Lee, Kyong Wan l（ソウル大、韓国）、Lee, Moon Young（国民大、韓国）、Lee, Sang Joon（国民大、韓国）、Li, Fenglin（元ソ連大使、中国）、Li, Xin（上海国際関係研究所、中国）、Li, Xing（北京師範大、中国）、Li, Yongquan（中国国務院）、Lin, Yung-Fang（国立政治大、台湾）、Liu, Junmei（复旦大、中国）、Ma, Hongmei（松山大）、Christopher Marsh（Democratizatiia誌、米国）、Jonathan Mizuta（米国）、Moon, Seok-Woo（朝鮮大、韓国）、Nam, Hye Hyun（延世大、韓国）、Olena Nikolayenko（スタンフォード大、米国）、Bella Pak（東洋学研究所、ロシア）、Pang, Dapeng（中国社会科学院）、Park, Soo-Heon（慶熙大、韓国）、Park, Hye Kyung（翰林大、韓国）、Petr Podalko（青山学院大）、Qu, Wenyi（遼寧大、中国）、Seok, Huajeong（極東情報大、韓国）、Shin, Beom-Shik（ソウル大、韓国）、Elena Tyuryukanova（移民研究センター、ロシア）、Daria Ushkalova（経済研究所、ロシア）、Xiao, Huizhong（華東師範大、中国）、Xu, Hongfeng（中国社会科学院）、Yang, Cheng（華東師範大、中国）、Yoo, Yeong Taek（韓国）、Youn Ik Joong（翰林国際関係研究所、韓国）、Zheng, Yu（中国社会科学院）、浅野豊美（中京大）、油本真理（東京大・院）、伊賀上菜穂（大阪大）、宇多文雄（上智大）、大島一（国立国語研究所）、大津定美（大阪産業大）、岡本隆司（京都府立大）、片岡浩史（キエフ大・院）、河本和子（学習院大）、木村崇（京都大名誉教授）、久保慶一（早稲田大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、笹原健（麗澤大）、塩川伸明（東京大）、島田智子（関西大）、武田友加（東京大）、田中孝史（筑波大）、田中良英（拓殖大）、中馬瑞貴（慶応大）、寺島憲治（東京外国語大）、中野潤三（鈴鹿国際大）、沼野充義（東京大）、野中進（埼玉大）、袴田茂樹（青山学院大）、麓慎一（新潟大）、松井康浩（九州大）、道上真有（大阪市立大）、三輪博樹（筑波大）、本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、吉村貴之（東京外国語大）、和田春樹（東京大名誉教授）
2月　7日　渡辺圭（千葉大・院）
2月10日　Radoslaw Tyszkiewicz（在日ポーランド共和国大使館）
3月4-6日　Ozan Arslan（イズミル経済大、トルコ）、Mustafa Aydin（トッブ大学、トルコ）、Rebecca Chamberlain（ロンドン経済大、英国）、Igor Dulaev（北オセチア国立大、ロシア）、Henry Hale（ジョージ・ワシントン大、米国）、William Hill（国防大、米国）、Gia Jorjoliani（トビリシ大、グルジア）、Senol Korkut（トルコ宗務院）、Anatoliy Kruglashov（チェルニフツィ国立大、ウクライナ）、Luke March（エジンバラ大、英国）、Sergei Markedonov（政治軍事研究所、ロシア）、Oktay Tanriserver（中東工科大、トルコ）、Valentin Yakushik（キエフ-モヒリャ・アカデミー大、ウクライナ）、秋田茂（大阪大）、秋葉淳（千葉大）、安達祐子（上智大）、粟屋利江（東京外国語大）、池田嘉郎（新潟国際情報大）、井上貴子（大東文化大）、猪口孝（中央大）、上垣彰（西南学院大）、大石高志（神戸市外国語大）、川島真（東京大）、菅英輝（西南女学院大）、北川誠二（東北大）、木村崇（京都大名誉教授）、雲和広（一橋大）、小松久恵、米家志乃布（法政大）、佐藤隆広（神戸大）、佐原徹哉（明治大）、澤江史子（東北大）、

志摩園子（昭和女子大）、住家正芳（東洋大）、月村太郎（同志社大）、唐亮（法政大）、長崎暢子（龍谷大）、中村唯史（山形大）、西山克典（静岡県立大）、沼野充義（東京大）、野林厚志（国立民族博物館）、袴田茂樹（青山学院大）、間寧（JETRO）、羽場久美子（青山学院大）、古矢旬（東京大）、古谷大輔（大阪大）、黛秋津（東京大）、三谷惠子（京都大）、三輪博樹（筑波大）、六鹿茂夫（静岡県立大）、村田雄二郎（東京大）、本村真澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、山根聡（大阪大）、山室信一（京都大）、吉井昌彦（神戸大）、吉田修（広島大）、王柯（神戸大）

3 月7-8 日　諫早勇一（同志社大）、梅津紀雄（東京国際大）、扇千恵（同志社大）、亀山郁夫（東京外国語大）、高橋清治（同）、中村唯史（山形大）、三谷惠子（京都大）

3 月 14 日　貝澤哉（早稲田大）、北見諭（神戸外国語大）、下里俊行（上越教育大）

3 月 19 日　Romuald Huszcza（ワルシャワ大、ポーランド）

3 月 23 日　Liu, Shuang（黒龍江省社会科学院）、Da, Zhigang（同）

3 月 27 日　吉村貴之（東京外語大）

4 月　2 日　窪田順平（総合地球環境学研究所）

4 月　8 日　磯貝健一（京都外国語大）、磯貝真澄（神戸大・院）

◆　研究員消息　◆

宇山智彦研究員は 1 月 30 日～ 2 月 8 日の間、新学術領域研究に関する国際セミナーでの比較帝国史に関する研究発表等のため、インドに出張。

長縄宣博研究員は 1 月 30 日～ 2 月 9 日の間、新学術領域研究に関する国際セミナー出席及び報告等のため、インドに出張。また、4 月 22 日～ 10 月 2 日の間、コロンビア大学ハリマン研究所等にてロシア研究と中東研究の融合をめざして研究従事、及び科学研究費研究に関する資料調査のため米国、ロシアに出張。

岩下明裕研究員は 2 月 22 日～ 3 月 1 日の間、新学術領域研究に関する資料収集のためロシアに出張。また、3 月 30 日～ 4 月 5 日の間、新学術領域研究に関する資料収集のため英国に出張。また、4 月 16 ～ 21 日の間、科学研究費盤研究に関する学会報告のため米国に出張。

望月哲男研究員は 3 月 9 ～ 20 日の間、科学研究費研究に関するハーバード大学、オックスフォード大学にて報告及び研究打合せのため米国、英国に出張。また、5 月 8 ～ 11 日の間、新学術領域研究に関する国際会議出席のため韓国に出張。

荒井信雄研究員は 3 月 14 ～ 21 日の間、科学研究費研究に関する資料閲覧及び収集のためロシアに出張。

野町素己研究員は 3 月 22 日～ 4 月 1 日の間、総長室重点配分経費「公募型プロジェクト研究等支援経費」「若手研究者自立支援」による学会出席のためロシア、英国に出張。

松里公孝研究員は 3 月 10 ～ 28 日の間、新学術領域研究に関する現地調査のためグルジア、南オセチアに出張。また、4 月 4 ～ 9 日の間、新学術領域研究に関する資料収集のため、米国に出張。また、4 月 29 日～ 5 月 10 日の間、科学研究費研究に関する現地調査のためギリシャ、ロシアに出張。

家田修研究員は 3 月 23 ～ 31 日の間、環オホーツク環境研究に関する研究打合せと関連資料収集のため英国に出張。

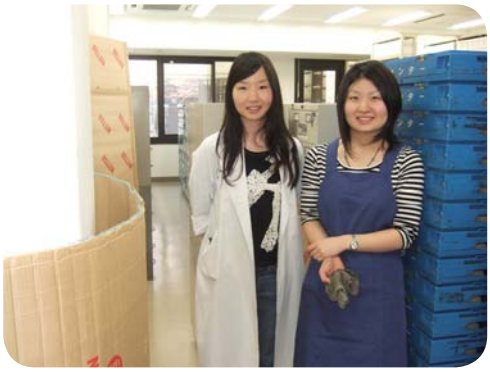
田畑伸一郎研究員は 5 月 7 ～ 11 日の間、新学術領域研究に関するシンポジウムへの参加のため米国に出張。

改修後のまっさらな建物に戻ってきました。引越し３日後（2009.5.7.）のようすです。

ここは編集室。出版物のバックナンバーで埋められ、まるで倉庫で働くようになる予定

ゴールデンウイーク中に整理する予定だったが、桜花にみとれていてできず。これからがんばろうと気合を入れるＡ研究員

壁をとりはらって、一体的なスペースを生かした図書室になりました



利用者のみなさまが快適に利用できるよう、私たち図書室のスタッフは、はりきって準備をします

エッセイ

石井 明　旅順ソ連軍烈士陵園参観記　p. 15

望月哲男　ITP の場をめぐって：ハーバード、オックスフォード訪問記　p. 17

野町素己　ロムアルド・フシチャ教授をお迎えして　p. 21

2009 年 5 月 15 日発行

編集責任　大須賀みか
編集協力　田畑伸一郎
発行者　岩下明裕
発行所　北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/